慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生産消費の均衡に関する論争 (セイの市場理論を中心として)
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.4 (1925. 4) ,p.521(27)- 635(141)
JaLC DOI	10.14991/001.19250401-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250401-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一語に盡きるのである。而して此結論は論の發途に先だつて既に與へられて居る。彼れの頗る豐富なる引證にも拘らず、「プロレタリヤ社會主義」が學問的著作よりも Tendenzschrift たるの嫌を免れないのは、此が爲めである。或は此を目するに一篇の抒情詩を以てする者があつても、それは甚しい妄評ではない。而して本篇の始めに記したやうに、ゾムバルトの右の傾向は、既に開戰後間もなく著された Händler und Helden に現れて居るから、彼れの近業も或意味に於ては世界大戰の產物だと謂つて好い。世界大戰は獨墺の公認マルクシスト中にも、幾多の、或はマルクシズムに對する信仰を薄くし、或はマルクシズムと所謂獨逸精神との調和に腐心するものを出でしめた。ゾムバルトは穿鑿と推究とに沒頭する學究ではない。彼れが言ふ事は、當否如何を問はず、彼れが言はんと欲することである。往日マルクス心醉者たりし彼れをして今やマルクシズムには殆ど一も取るべき所なしと言ふに至らしめたものは、研究の進步ではなくて、ゾムバルトの裡の感情の嵐とも謂ふべきものである。

生產消費の均衡に關する論爭

（セイの市場理論を中心として）

增井幸雄

一

私は嘗て、一般には Adam Smith の經濟學說を通俗化して經濟學に形態を與へ之を普及せしめたる功勞者なりとして知られて居る Jean-Baptiste Say は、大體に於て Smith の祖述者と認めらるべきことは疑ないが、而も個々の點に於ては其の所說は Smith の上に出でゝ斯學の進步に貢獻する所決して少なからざりしものであると云ひ、幾多の經濟學者並びに經濟學史家は Say の最大の貢獻たり榮譽たるものとして其の市場理論（Théorie des Débouchés）を擧げて居ることを指摘し、且つ、それは Say 自身にとつては頗る得意とする所のものでもあり、又、其の經濟政策上の意見の基

礎とせられて居つて重要なる役割を演じて居るものでもある旨を述べたことがある。[2] 勿論、此の說は Say の創見に係るものであるとは云はれない。少なくとも、Say 以前に於て斯かる意見を述べた者は絕無ではない。例へば、英國の Dean Tucker は Queries on the Naturalisation Bill, 1752, p. 13. に於て之を說いて居る。伊太利の Mengotti も Dissertazione sul Colbertismo, 1792, p. 31. に於て之を說き、特に同書の千七百九十五年版に於ては一層明瞭に之を說いて居る。然し、之を充分に、又、滿足に說き示したのは Say を以て嚆矢とするのである。[3]」。

（一）慶應義塾大學經濟學部同人編「經濟學說研究」二七——二三五頁參照。

（2）McCulloch, Principles of Political Economy, Third and New Edition, 1843, p. 210.

然るに此の說は、同時代の有力なる經濟學者の一部からは贊同を得たが、他の一部からは贊同を得ることが出來なかつた。思ふに、此の市場理論は、生産と消費とは自ら其の間に均衡を得て生産過剩を生ずることなしとの論旨を包含して居つて、頗る樂觀的色彩を帶びて居るが爲めに、社會の狀態が將來に於て自ら改善せらるべきことを信ぜざる悲觀論者から反對を受け得るのみならず、當時英國を始めとして諸國に商業不振の現象が瀰漫しつゝあつたが爲めに目前の事實に囚はれたる人々からも忽ち反對の聲が擧げられ得たことは、吾人之を想像するに難くないのであつて、James Mill, David Ricardo 及び J. R. McCulloch からは贊同を得たが、R. T. Malthus 及び J.-C.-L. Simonde de Sismondi からは手强き反對を受けた、そして前後約二十年間に亘つて是等の學者の間に屢〻論戰が行はれたのである。而も此の論戰の行はれつゝあつた間に於て Say の意見は漸次に發展し完成し且つ修正せられて行つたのであつて、其の著 Traité d'Économie Politique. の生前に於ける最終版たる第五版、並びに其の晩年の著述に係る Cours Complet d'Économie Politique Pratique. には斯かる鍛錬を經たる市場理論が展開せられて居るのである。以下、私は、先づ Say の比較的に早い頃の市場理論を紹介し、次に、それが如何に他の學者によつて贊成せられ反對せられ、Say 自身によつて辯護せられたかの經路を叙して、結局如何なる修正が加へられるに至つたかを述べやうと思ふ。

二

Say の Traité d'Économie Politique. は版を重ねる毎に改訂せられて來たが、其の市場

理論は千八百三年に公にせられたる同書の初版から既に現はれて居る。私は不幸にして今は同書の初版乃至三版を參照するの便宜を有して居らないが、幾多の經濟學史家[1]が Say の市場理論を紹介し論評するに當つて其の初版を引用して居るに顧みるときは、斯く斷じて差支ないと思ふ。又、同書の再版後三年にして公にせられたる Catéchisme d'Économie Politique. には明かに市場理論の骨子が簡單ながらも說かれて居る。[2] 故に、Say の市場理論の漸進的發展の跡を見むが爲めには是等初期の著作に現はれたる所を親はなければならない。然し、Say の此の說が學界の注意を惹き且つ華々しき論戰を惹起したのは Traité 第四版の公表後の事であるから、茲では右の第四版に現はれたる所によつて其の市場理論の大要を窺ふことにする。

(1) 例へば Gide et Rist, Histoire des Doctrines Économiques, Ch. II, § IV.

(2) Catéchisme d'Économie Politique, Ch. XI. (Œuvres Diverses de J.-B. Say. Édition Guillaumin, 1848, pp. 41-6.)

貨幣の使用せらるゝ社會に於ては、生産物は貨幣を相手として交換せられる。然るに Say は、生産物は生産物と交換せられるものであると云ふ。即ち、市場理論を展開する Traité 第一篇第十五章の劈頭に於て曰く、「物に何等かの效用を創造し之に價値を與ふることを業とする者は、只管に此の價値が他人の尊重する所となつて、之に對して支拂を受くるに至らむことを希ひ、資力を有する他の人々が此の物件を獲得するに至らむことを希ふ。然らば、此の資力は如何なるものから成り立つか。曰く、他の價値から成り立つ。他の諸生産物から、即ち、他人の産業・資本及び土地の所産から成り立つ。從つて、一見矛盾するが如くなるも、生産物に對して販路を開くものは生産物たるのである」[3]と。而して此の命題を證明せむが爲めに、Say は交換の目的物を貨幣なりとする論を次の如くに排斥して居る。「人或は、自己の商品と換へて得むと欲する所のものは他の商品にあらずして貨幣なりと云ふ者あるべきも、此の者の賣らむとする商品を買はむとする者は先づ自己の商品を賣るにあらざれば前者に貨幣を以て支拂ふことを得ない。……又、此の者が貨幣を欲する所以のものは、之を以て自己の産業に必要なる原料品又は生活維持に必要なる食料品を買はむが爲めに外ならないではないか。」「此の者の貨幣を欲する其の理由が、之を地中に埋藏せむが爲めなる場合に於ても、其の終局の目的は常

に之を以て何物かを買はむとするに在る。假令、埋藏者自ら買入をなさずとするも、其の相續者、又は何等かの理由によつて之を取得する人々に於て之を以て買入を行ふであらう。」「此の者に必要とする所のものは生産物であつて貨幣ではないのである。……貨幣は生産物の價値を運ぶ車に外ならない。何人に於ても、それ〴〵必要とする所のものを買入れるのは、一時或る金額に變形せられたる自己の生産物の價値を以てするものである」(4)と。斯くして Say は、世人の屢〻口にするが如く「貨幣不足なるが故に賣れ行き思はしからずと云ふことは、手段を原因と誤り認める所以であつて……實は却て、他の生産物が稀少なるが故に賣れ行き思はしからずと云ふべきである。他の價値にして眞實に存在する場合には、是等の價値の循環並びに相互的交換に用ひらるべき貨幣は充分に存在するを常とする。若し貨幣にして取引量に對して不足を告げるに至る場合には、之が補足は常に速かに行はれる。……或る過剰品が何等の買手をも見出す能はざる場合に於て、此の販賣を妨げるものは決して貨幣ではないのである(6)と附言し、「……貨幣は〔賣買と云ふ〕此の二重の交換に於て單に瞬間的の職分を行ふに過ぎない。取引が終局的に終了した曉に於ては、一種の生産物は他種の生産物と交換せられたるものなることが發見せられるであらう」(5)と結んで居るのである。

(3) A Treatise on Political Economy, By Jean-Baptiste Say, translated from the 4th edition of the French, by C. R. Prinsep. Third American Edition, 1827. p. 76.

(4) op. cit., pp. 76-7.

(5) op. cit., p. 77.

(6) op. cit., p. 78.

一の生産物に對して販路を開くものは他の生産物であると說く Say は、更に一歩を進めて、凡そ生産あればそれは直ちに他の生産物の購買手段となり、一の生産物の增加は直ちに他の生産物に對する需要增加となる、と論じて居る。曰く「一の生産物は、それが創造せらるゝや否や直ちに其の瞬間から、其の價値の全額の程度まで他の生産物に對して販路を提供するものなることは注目すべきである。生産者は、生産物を完成したる場合には、其の價値が自己の手中に在つて消失せむことを虞れて即座に之を賣らむと焦慮する。面も彼れは、之によつて得る貨幣を手離さむことにも等しく焦慮する。蓋し、貨幣の價値も減少を來し得るからである。

然し貨幣を手離し得る唯一の方法は、他の何等かの生産物を買ふことに在る。斯く、一種の生産物の生産と云ふ事實あるのみにて、直ちに他の生産物に對する販路が開かれるのである」(7)と。斯くして Say は、此の命題から論を推して、此の故に、豐作は農業者にとつてのみならず有らゆる生産物の商人にとつても等しく有利であり、商業の一部門の繁榮は他の一切の部類の生産業にとつて有利である、之に反して、凶作は一切の生産物の販路を狹め、商業の一部門の不振は他の總べてのものに感知せられる、とて各人間、各種生産業間、各種生産物間に於ける利害の共通を說いて居るのである。(8)

(7)(8)　op. cit., p. 78.

凡そ生産物の生産あらば其の瞬間から其の價値の全額の程度に於て直ちに他の生産物に對する需要を生じて諸生産物は互に交換せられると云ふ Say の所說に從へば、生産過剩とか市場に於ける生産物の停滯とか云ふが如きことは全く起り得ない筈であるが如くに思はれる。然るに、實際に於ては屢、市場に頗る甚しき商品の供給過剩を生じ、之に對する販路を發見するに多大の困難ある場合がある。此の事は果して如何に說明せらるべきか。是等過剩なる商品の一つは他と何故に交換されざるか、と云ふ疑問が起り得る。Say 自身も、斯かる事實の生じ得べきことを認めて居り、斯かる疑問の起り得ることを豫期して居る。然らば Say は此の事實を如何に說明して居るか。曰く、「個々の生産物の供給過剩は、其の生産物が餘りに豐富に生産されたるが爲めか、又は、他の生産者の生産が不足したるが爲めか、何れかの理由によつて其の生産物が之に對する需要總量を超過したるによつて生ずる。」然し同時に、「或る生産物が過剩なるは、他の生産物の生産が衰へたるが爲めである。換言すれば、人々が購買量を減じたのは其の所得を減じたるが爲めであり、其の所得を減じたるは彼等の生産手段の使用に種々の困難を發見したるか、又は、是等の手段がそれ自身不足なるか、何れかの理由によるのである。」(9)と。

之によつて見れば、Say は少なくとも、一部の生産物が過剩に生産せられること、即ち、部分的生産過剩の起り得ることは之を認めて居ると云はなければならない。現に彼れは、脚註に於て、「予が本章に說く所は、一生産物が他の總べての生産物に比して過多に生せしめらるゝことあり得ずと主張するにあらずして、單に、他の生産

物の供給は一生産物の需要に資すること最も大なることを主張するに止まる」(10)云々と斷つて居るのである。而も彼れは、此の一生産物の過剩の原因は他の生産物の生産不足に在りとの自説を此の場所に於ても擁護して居るのであつて、他の生産物の生産に斯かる不足の存するのは何等か人爲的の障碍の存するに原因すとなし、斯かる障碍にして除却せらるれば忽ち本然の途に立ち返つて生産不足の事實は消滅すると考へて居り(11)、「若し生産にして全く自然に放任せられたりとせば、一種の生産のみが獨り他に先んじて進み其の生産物が不均衡に低落するが如きことは、稀に見る所に屬する(12)と云つて居る。

(9) op. cit, pp. 78-9.
(10) op. cit, p. 78.
(11)(12) op. cit, p. 79.

猶ほ Say は、右の所説を更に側面から固めむが爲めに、生産物に對する需要の淵源は生産されたる價値にのみ存するものであつて、生産物の生産される個所以外には何等獨立の販路が開かれるものでない、と論じて居る。其の意に曰く、若し生産者にして、其の相手とする消費者中には官吏・醫師・法律家・牧師等の如く何等物質的生産を行はざる幾多の階級もありと信じ、之より推して、自ら生産しつゝある者の提供する販路以外に猶ほ幾多の販路ありと思惟するが如きことありとせば、それは、皮相の觀に捉はれて事物の根本を洞察せざることを表明するものである。蓋し、茲に一人の僧侶があつて袈裟を買はむが爲めに商人の許に赴くものとすれば、貨幣の形に於て此の僧侶の携へ行く價値は、自ら之を生産したる納税者の手から出て、收税官の手を經て僧侶の手に入つたものに外ならずして、僧侶は生産者に代位したるに過ぎないのである。袈裟に對して行はれたる支出は、生産者の行ふべかりし他の支出を犧牲として行はれたものである。何れにしても、一生産物の買入は他の生産物の價値を以てして始めて行はれ得る所である(13)、と。

(13) op. cit, p. 80.

以上が Say の市場理論の根本の大要である。然るに此の理論は、Say の眼から見れば、軈て世界の政策に變更を來さしめるに足る(14)程の重要なる根本的原理であつて、彼れは自から此の原理からして經濟政策上の教訓となるべき四個の推論を導き出して居る。其の第一は、何れの社會に於ても、生産者の數が多く其の生産

物の種類多きほど、是等の生産物の販賣は益々迅速となり多數となり廣汎となる、從つて、價格は需要に伴なつて上昇するが故に益々生産者にとつて有利となる、と云ふことである。然し Say は、一たび生産されたる價値は一人の手から他人の手に移る間に於て增加することなきが故に、右の如き利益は眞の生産からのみ生ずるのであつて生産物の强制的流通からは生じない、他の人々の生産によつて生活する者は生産者に大なる損害を與へつゝ之に代位するのみであつて其の生産に對して何等の需要を創造しない、と附言して居る。推論の第二は、各人は萬人の一般的繁榮によつて利するものであり、一産業部門の成功は他の總べての産業部門の成功を促進するものである、と云ふことであつて、Say は之よりして、各人は周圍の人々の繁榮しつゝあるほど益々容易に有利な仕事を發見し、繁榮せる都會の商人は邊僻の田舍の商人よりも一層多大の賣上があると同樣に、田舍の住民と都會の住民とは互に他によつて利益し、一地方と他地方、一國と他國とは互に他によつて利益するものである、と說明敷衍して居る。推論の第三は、外國生産物の輸入は內國生産物の販賣にとつて有利である、と云ふことであつて、Say は之を說明して、一國は自國の生産物を以てしてのみ外國生産物を買ひ得るものである、國內に正金を産せざる國は正金を以て支拂をなさむが爲めには先づ自國の生産物を以て此の正金を買入れざるべからざるが故に、外國に對する支拂が正金を以てせられると商品を以てせられるとを問はず、外國よりの購入は等しく自國の産業に同樣の販路を與へるものである、と云つて居る。第四の推論は、單に新なる生産物の出現を喚起するに過ぎざるが如き單純なる消費は、一方で生産する所のものを他方で消費し去つて何等國富に貢献する所はない、消費が眞に有利なるものたらむが爲めには、それは欲望を滿足せしめると云ふ其の本質的なる目的を果すものでなければならない、從つて、産業を奬勵せむが爲めには、單純なる消費あるのみを以て足れりとせず、更に、人々の間に消費の欲求を生ぜしめ欲望、嗜好の發達を助長することを必要とする、と云ふことである。

Say は時の政府の施設を例示して其の誤れることを指摘し非難し、却て一二外國の施設の頗る賞揚すべきものあることを述べて居るのである。(15)

(14) Traité, Discours Préliminaire (Ve Éd, tome I. p. cij.)

（15）　op. cit., pp. 81-3.

III

Say の市場理論は、英國に於て知名の學者の贊同を得た。彼れが Traité の初版を公にしてから五年を經たる千八百八年に、James Mill は、Edinburgh Review 誌上 Spence に對して答へたる論文 Commerce defended. 中に於て、消費と生産とは其の範圍を等しうすること、從つて生産過剰の發生の不可能なることを論じたが(1)、其の後約十年を經て Ricardo は Principles of Political Economy and Taxation, 1817. 中に於て Say の名を擧げて其の所說を裏書し、賞揚し、利用して居る。即ち Ricardo は同書第十九章(2)に於て、資本集積の利潤に及ぼす影響を論じて、若し勞働者の必要品が常に資本の增加と同じく容易に增加せしめられ得るものとせば、賃銀の上昇を來すべき永久的の原因は存在せず、從つて資本が如何なる高まで集積せられるとも利潤の率には何等永久的の變動あり得ざるものであるとなし、之と反對の立場に立てる Smith の意見を斥け、而して自說を確かめるに Say の意見を以てして居るのであつて、「Say は、生産は需要によつてのみ制限せらるゝが故に、如何なる資本と雖も一國に於て使用せられざるものあることなき旨を滿足に說き示した(3)」と云つて居る。Ricardo の Say 說に對する贊成論は斯かる關係に於て試みられて居る。今、その所說の大要を見やう。

（1）James Bonar, Malthus and his Work, II. Ed., p. 293, note 1.

（2）此の章は、同書第二版以後に於ては第二十一章となつて居る。蓋し、是等の版本に於ては、第一版に於て Ch. V. と Ch. VI. との間に挿入されたる Ch. V.* 並びに、Ch. VIII. と Ch. IX. との間に挿入されたる Ch. VIII.* が、それ〴〵獨立の章とされたからである。

（3）Ricardo, Principles, I. Ed., pp. 398-9.

Ricardo は先づ、需要なき貨物が繼續的に生産せられると云ふが如きことはあり得ない、一方に於ては未だ滿たされざる欲望があり他方に於ては以て交換の資に供すべきものある限りは、其處に有效需要が存する、と云ふ。曰く、「何人も、消費又は販賣の目的を有せずして生産することはない、又、其の販賣するや常に自己にとつて直接に有用なるか又は將來の生産に貢獻すべき或る他物を買入るゝの目的を以てせざることはない。然らば彼れは、生産することによつて必然的に、自己の貨

物の消費者となるか、又は、或る他人の貨物の購買者・消費者となるのである。彼れが、自己の目的即ち他物を獲得するの目的を達せむが爲めには如何なる物を生産するを最も有利とするやに就いて永く無分別たるべしとは想像され難い所であるから、彼れが何等世間に需要なき貨物を繼續的に生産すると云ふが如きことはあり得べくもないのである。」「人は、望んで而も未だ滿たされざる何等かの滿足を有する間は、一層多量の貨物に對して需要を有するであらう、而して、之と交換に提供すべき何等かの新なる價値を有する間は其の需要は有效なる需要であらう」(4)と。

(4) Ricardo, op. cit., pp. 400-1.

既に然りとせば、若し社會に所得の增加があつた場合には、當然有效需要の增加を來すこととならざるを得ない。即ち Ricado は云ふ。「若し年額十萬パウンドを有する人に更に一萬パウンドが與へられたりとせば、彼れは、之を金庫の中に仕舞ひ込まずして、一萬パウンドだけ其の支出を增加させるであらう。或は之を自ら生産的に使用するであらう。或は又その目的の爲めに他人に貸すであらう。何れの場合に於ても需要は增加を來すであらう。尤も、此の需要はそれ〴〵異なる物に對して行はれるではあらう。……而もそれは矢張り等しく需要である」こと(5)。即ち、Ricardo は、社會に於て所得の增加あるときは、之を獲得したる人又は他の何人かによつて、何等かの貨物に對する需要が創造せられる、と云ふのである。

(5) Ricardo, op. cit., pp. 401-2.

然らば此の所得は何によつて提供せられるか。Ricardo は、それは貨物又は勤勞によつて提供せられると云ふ(6)。即ち曰く「生産物は常に生産物又は勤勞によつて購はれる。貨幣は單に、依て以て交換の行はるゝ仲介物に過ぎない」(7)と。斯くして、Ricardo の所說に於ては、苟くも貨物又は勤勞の生産せられ提供せらるゝ限りは、全體の貨物に就いて需要なき供給即ち生産過剩なるものはあり得ない、とせられて居るのである。

(6) Say は、生産物は生産物によつて購はれると云つて居るが、而も此の生産物中には無形の生産物も包含せられて居る。（此の點に就いては Traité, Liv. I, Ch. XIII. 並びに、三田學會雜誌大正十二年七月號一八七——一九〇頁參照。）故に結局 Ricardo の所見と合致して居る。

(7) Ricardo, op. cit., 403.

勿論 Ricardo は Say と同樣に「個々の貨物に就いては過大に生産せられることが

あり、市場には斯かる貨物が之に費やされたる資本を償還せざる程の供給過剰が起り得る」[8]ことを認めて居る。「然し、斯くの如き場合は總べての貨物に就いては起り得ない」[9]と云つて居る。即ち云ふ。「穀物に對する需要は之を食ふべき人口數によつて制限せられ、靴及び衣服に對する需要は之を纏ふべき人數によつて制限せられ居るが故に、社會又は其の一部が、其の消費し得る又は消費を繼續せむと欲すると同量の穀物を所有し又同數の靴、帽子を所有するに至ることはあり得やう。然し、自然又は技術によつて生産せらるゝ何れの貨物に就いても斯くの如きことあるべしとは云はれない。或る者は獲得能力の限度まで葡萄酒の消費を增すであらう。又他の者は、葡萄酒は既に充分に之を有するが故に、轉じて自己の家具の數を增し又は其の品質を改善せむとするであらう。更に又、庭を飾り家を增築せむと欲する者もあり得やう。是等の全部又は一部を行はむとするの希望は各人の胸中に植え付けられて居る。必要とせらるゝものは手段のみ。而して此の手段を供し得るものは生産の增加を措いて他にないのである」[10]と。

(8)(9)(10) Ricardo, op. cit., pp. 403-4.

尤も Ricardo は、「若し各人が奢侈品の使用を差控へて只管に資本集積に心掛けるならば、何等直接の需要あり得ざる或る分量の必要品が生産せられることになるであらう」と云ひ、「數の頗る限られたる貨物に就ては、普遍的供給過剰が起るやも知れざる」[11]とを認めて居る。「從つて、斯かる貨物をそれ以上に增加するとも之に對しては需要がなくなり、資本を增加するとも其の使用よりしては何等の利潤をも生ぜざるに至るであらう。人々が消費することを已むれば、生産することをも已むるに至るであらう」[12]と讓歩して居る。然し彼れは、斯く讓歩したればとて、爲めに一般的原則を攻擊することにはならない。例へば英國の如き國に於ては、國の全資本と全勞働とを擧げて必要品の生産に投ぜむとするの意向あるべしとは想像し難い所である」[13]と結んで居るのである。

(11)(12)(13) Ricardo, op. cit., p. 405.

四

一般的又は普遍的なる生産過剰の發生はあり得べからざる所なりとの說に就て James Mill 及び Ricardo に贊成者を見出したる Say は、是等の贊成者と共に、Simonde

de Sismondi 及び Robert T. Malthus に於て其の有力なる反對者を見出した。De Sismondi は、千八百十九年に英國に再遊して、折柄同國の産業界を見舞ひつゝありし不振恐慌と之に附隨して生じたる勞働者社會の困窮の狀態とを目擊して深き感慨に打たれ、來歸、その前年に Edinburgh Encyclopedia に寄せたりし "Political Economy" なる論文を更に擴大して、Nouveaux Principes d'Économie Politique, ou de la richesse dans ses rapport avec la population, 1819. を公にし、以て、Smith を奉じての理論上の見解を示せる曩きの自著 Richesse Commerciale, 1803. をば自己の經驗に基づいて批評する新見解を披瀝し、利害の自然的調和を結論する正統學派の學説が目前の活事實によつて裏切られ居ること、並びに、多數者の利益の爲めに國家の干渉を必要とすることを説いた。一般的生産過剩の發生不可能を説ける Say 及び Ricardo 等の説が先づ彼れの着目し論駁する所となつたのは當然の事である。今、同書の初版を利用することの出來ない私は、不本意ながら、八年後に公にせられたる同書の第二版(而も之に基づける獨逸譯)(1)に依つて、此の點に就いての彼れの所説の大要を窺はうと思ふ。此の第二版は、初版公刊後に Say, McCulloch 等との間に於ける數度の論戰を經て多大の改訂を加へられ「殆んど改作せられた」ものに外ならないが、而も「初版に於ける意見は其の儘に保たれ居る」(2)が故に、右の論戰の跡より見て補訂の分と思はるゝ部分を避けて、茲に彼れの最初の意見に近きものを窺はうと思ふ。

(1) Neue Grundsätze der Politischen Ökonomie, oder Der Reichtum in seinen Beziehungen zu der Bevölkerung, von J. C. L. Simonde de Sismondi. Nach der II. Ausgabe von 1827 übertragen von Robert Prager. Berlin, 1902.

(2) Ebenda, Bd. I, Vorbemerkung, S. XXII.

De Sismondi によれば、消費は過去に於て生産力の增加に伴なつて頗る發達したが、然し、それは無限に發達すべきものではない。「社會生活をなせる人間にあつては、自己の勞働は自己に對して無限に種々の享樂を提供するが故に、其の欲望は無限なるが如くに見える。人は、如何に多くの富を蓄積し得たりとも、「最早充分なり」と云ふの機會はあるまい。恐らく、蓄積したる富を享樂に換へるの手段を發見するか、又は少なくとも、其の富は自分にとつて必要なりと思惟するであらう。然し、消費を以て、何等の限度もなき力たり常に無限の生産を消化し盡さむとしつゝあるものたりと思惟するは大なる誤謬である」(3)。勿論、將來を考慮の中に入るゝこと

なくんば、現存の貨物は總べて之を消費するを得るであらうが、de Sismondi は、苟くも將來に於ける消費の途を確保し其の發達の途を保證せむとする限りは、消費は個人に就いても社會全體に就いても或る程度に、即ち所得の程度に限られなければならない、と云ふのである。

彼れは此の意を說明して次の如く云ふ。「凡そ一國の支出は一國の所得に制規されなければならない。此の所得は二方面を有する。富者に於ける眞實の利潤、貧者に於ける勞働能力、即ち是れである。富者は、自己の所得を構成する利潤をば如何に自己の諸欲望を滿たすべき個々の物件と交換すべきかを熟慮しなければならぬ。若し彼れにして自己の所得を超過することあらば、自己に利潤を與ふる資本より已むを得ず借入を行はざるを得ざるに至り、自己の將來に於ける利潤を減じて破滅を招くことになる。又、所得として自己の勞働のみを有する貧者は、之を支出し其の果實を享樂し得るに先だつて此の勞働を富者に賣らなければならぬ。……彼等の勞働能力は、それが利用せらるゝや否や直ちに一の所得となる。……而も彼等は、其の支出をば、自己の勞働に對して受取る價格に從つて制規しなければならない。尤も彼等は、此の價格以上の支出をも自己の小額の貯蓄又は借入によつて償ふことを得べきも、斯くの如きは自己にとつても社會にとつても危險である。所得の不足又は杜絕によつて彼等の行ふ自制も、それが生命、健康又は體力を脅かすに至るや否や忽ち社會にとつて危險となる。……故に、貧者も其の支出に於ては眞の所得を超えることを得ないのである」。(4)

然らば、所得は如何なる淵源より生ずるか。De Sismondi は云ふ。「一國にとつては、新なる所得は、節約によつて與へられ而して新なる希望の生産を成立せしめ得る各個の固定資本及び流動資本より生ずる」。(5)「又、所得は、流動資本が需要に關聯して生ぜしむる新なる勞働よりしても生ずる……」。(6)「充分なる用途あり確實なる消費の望みあるが如き新生産物を生ぜしむる新流通資本は、他人を害することなくして社會に二樣の新所得を與へる。一は富者に對する所得であつて、それは用ひた流通資本の增加を通じて與へられ、他は貧者に對する所得であつて、それは勞働を通じて與へられる。而して兩者何れの所得も新なる消費と換へられ、等しく賣手の販路を增大する。然しながら、單に所有者を變へるに過ぎざる所得は決

して新なる所得ではない。競爭者の損失によつて自己の所得の增加を來したる商人、自己の勞働者の賃銀減少によつて所得の增加を來したる製造業者の如きは毫も一國の所得に附け加へる所はない。勿論、彼等と雖も消費によつて商業に一個の有利なる販路を與へ、或る種の生産に刺戟を與へるではあらうが、それは單に他の同胞の消費に代位するに過ぎないのである」。(3)

(3) Neue Grundsätze, Bd. I, S. 57. (Buch II Kap. III.)
(4) Ebd., S. 88-9. (Buch II, Kap. VI.)
(5) Ebd., S. 274-5. (Buch VI, Kap. IV.)
(6)(7) Ebd., S. 275.

一方に於て消費の高は所得の高に制限せられざるべからずとする de Sismondi は、他方に於て、社會が、消費に向けらるゝ基本中より行ふ其の支出は一國に於ける生産の全部を用ひ盡さなければならない」(8) と云ふ。換言すれば、消費されざるが如き生産物、即ち不用又は過剩の生産物の生産を行つてはならないと云ふ。「……凡そ人間の勞働の唯一の目的は其の欲望を充たすの用意を爲すに在るのであつて、生産物が人間の使用に適せざるときは何等の價値なく……(9)」「富が此の目的を充たさざる場合には之が代りとなるべき同量の再生産を妨げることになる」。(10) ……世に、衣食住の點に於て未だ不充分なるものある人々の多數に存在する場合に於て、是等の人々の欲する所は其の購ひ得るもののみに限られ、其の購ひ得る所は其の所得の程度までに限られる。故に、若し所得又は資本中から富者の支拂ひ得る以上に多量の奢侈品が生産されたとせば、富者は恐らくは之を獲得し盡さむと欲するではあらうが、將來に於ける自己の所得のみならず貧者の所得をも減少遮斷するの危險を冒すことなくしては之を購買し盡すことが出來ない。從つて斯かる奢侈品を生産したる者も、之を富者の所得と交換して自己の資本を恢復することを得ざるに至るが故に其の生産を再開することが出來なくなる。又、貧者が其の所得と換えて取得し得るよりも一層多量の生活必需品が生産されたとせば、貧者は恐らくは之を獲て生活を向上せしめむことを欲するであらうが、彼等に斯かる願望あればとてそれが爲めに富者が彼等に一層高率の賃銀を提供し又は一層多量の勞働を要求するに至ることあるまじきが故に、彼等は其の僅少なる貯蓄を浪費し從つて一層貧しくなることなくしては其の願望を充たすことが出來ない。

從つて、穀物の如き生活必需品も、饑餓に瀕しつゝある多數の人々を前に控えて見す〳〵賣れずに終り、生産者は資本を回收する能はずして再生産に投資することが出來なくなるであらう」。(11) 「勿論、時としては大なる生産過剰が價格の低落を通じて從來よりも一層多量の消費を來すことはあり得る。然し、其の終局的の結果は決して有利ではないのである。蓋し、消費に向けられ得る所得が一定なる場合に、生産者に於て富者の所得に二倍する奢侈品又は貧者の所得に二倍する生活必需品を市場に出さば、之を賣り盡さむが爲めには價格を半減するの必要がある。此の場合、富者及び貧者は、消費者として利益する所ありしと信ずるかも知れない。然し此の富者中には生産者が含まれ居るものなるが故に、富者は消費者として利する以上に生産者として損失することになる。生産物の販賣に際しての此の五割の損失は、同じ程度まで彼等の資本及び所得に影響し、次年度に於ける消費を減じ、勞働に對する需要を減じて貧者の所得を減ずることとなり、後者は更にそれ以下の諸年度に於ける富者の所得の減少を來すことになる」。(12) 「斯くの如くなるが故に、一國の支出は所得の限度に限られざるべからざると同時に、生産量の全部は消費の爲めに向けらるゝ基本によつて吸收されなければならない。此の事あらば、絶對的消費の結果として同量又は一層多量の再生産が行はれ、茲に、圓は擴大せられて螺旋となり、前年に十だけ生産し消費したるものは今年は十一だけ生産し消費することを期待し得るに至るのである……即ち、富者が所得の一部を貯へて之を資本に補足し又は勞働者に提供すべき賃銀に附加したりとせば、其の結果として勞働は一層多量に且つ一層高價に賣却せられる、從つて此の新資本は之に對する所得を生ぜしめ、此の所得は一の新なる消費を要求するに至るのであつて、前年度に行はれたる貯蓄は今年度に使用せられ、一部は所得として富者の享樂を高め、一部は賃銀として貧者の享樂を高めるに至るのである」。(13)

(8)(9)(10) Ebd., S. 89.
(11) Ebd., S. 91-2.
(12) Ebd., S. 92-3.
(13) Ebd., S. 93-5.

De Sismondi の見る所によれば、經濟社會の健全なる進歩發達は事態が右の如くなる場合に於て始めて期待せられ得るのであるが、生産者が互に無制限なる競爭

を行ひつゝある現代の經濟組織の下に於ては、彼等の行動は正しく一國の所得を減少せしむるに傾むくものであると云ふ。彼れは思へらく、分勞は絶えず勞働の生産力を增加せしむるが故に、生産者は自己の市場の擴大を緊急の必要事とするのであつて、彼れの財産の增加は一に繫つて市場の擴大に存する。此の故に、生産者は常に顧客の眷顧を自己の一身に集めむことに努めざるを得ないのであつて、此の爲めには、新なる所得に對する交換を自己に引き寄せ得る望みある場合に、は同業者を犧牲としても自己の販路を擴大せむことに熱中し、又、彼れの注意は絶えず勞働又は勞働材料の使用に際して節約を行はむことに向けられる。彼等が有利なる新經驗を利用し新なる機械を利用するに至る所以は茲に存するのであるが、其の結果は果して如何。最初に斯かる態度に出でたる者は、素より勞働者の數を減じて從來と同量の生産に甘んずることなく、進んで同數の勞働者によつて一層多量の生産を行ふに至るが故に、他の同業者は右の新機械が生産力を高めたると同じ割合を以て勞働者を解雇せざるを得ざるに至り、茲に勞働者の所得を減せしめることになる。加ふるに、從來の舊式生産方法を固守しつゝある製造業者は暫らくは損失に堪へ得ても結局は閉鎖して其の所得を失ふに至らざるを得ざるが故に、富者階級の所得は新機械の使用者に集中せられて從來に比し毫も增加を來さない。即ち、一般に需要は減じ、販路は狹められて、自ら生産過剩に導くことにならざるを得ないのである。(14) 尤も、一人の勞働を節約する新發明は常に一部の人類に對しての不幸なりとは結論すべきでない。人間の勞働力を倍加せしむる發明は何れも有用であるが、唯、それは消費との關係に於てのみ有用に應用せられ得る。即ち、消費者が一層多量の生産物を欲求する場合には同量の勞働を以て一層多量を取得せしめ得ることを通じて有用となり、又、消費者が一層多量の生産物を欲望せざる場合には、生産者に對して一層多大の休息を保證することによつて有用となり得るのである。社會は、其の生産力の增加によつて苦しむのではない、生産せむが爲めに生産する場合に於ける此の生産力の惡用によつて苦しむのであると。(15)

加之、de Sismondi は、財産又は所得の分配の不公平なる場合には是れ亦販路を狹めるものであると考へて居る。其の云ふ所によれば、人々の幸福及び享樂が殆ん

ど平等なるか、或は多數者が困難しつゝあるに小數者が過剰の間に生活しつゝあるかは、國民の幸福にとつて無關係たり得ないと同じく、商人の富の增加にとつても無關係たり得ない。即ち、享樂の平等は生産者の商業を益々多く擴大せしめ、其の不平等は益々之を狹少ならしめるものである。蓋し、富者も貧者も共に所得を消費するは一なれども、其の消費の仕方を異にするのであつて、富者は、之を貧者に比較すれば、資本を消費すること多く勞働を消費することが少ない、人口を利することと遙かに少なく富の創造に貢献することも遙かに少ないのである。彼等は、貧者よりも無限に多くを需要するにあらずして一層良質のものを需要し、是等良質のものを作り得る少數熟練の勞働者に高給を支拂ふが、是等の勞働者は、集積し難く從つて國民的の富を構成すること能はざる享樂を作るに過ぎずして、不生産的勞働者と呼ぶべきものである。十萬リーヴルの所得が百の家族に等しく分たれ居る場合には、各家族は一層良質の麵麭を食ひ肉を食ひ葡萄酒・麥酒を呑んで農業を促進せしめるであらう、又、一層品質の優れる內國製の衣服を纏ふであらう、彼等の奢侈は多數の衣服を所有し充分なる入浴を行ふことから成るであらう、斯くして內國工業の生産物に對する販路を擴大して之を大に促進せしめるであらう。若し之に反して、十萬リーヴルの大部分が一人の手に歸して一人の富者と九十九人の貧者とが存在する場合には、一國の産業に對して與へらるゝ刺戟は右の場合よりも遙かに少なからざるを得ない。富者の出現は資本の增加を促し、資本の增加は大工場への作業の集中を助長するも、斯かる大工場の生産物は富者の使用から遠ざけられる、而も貧者の側からの需要は決して多大でない。斯くして販路は却て狹められるに至るのである。(16)

(14)　Ebd., S. 262, 264-6.(Buch IV, Kap. III.)

(15)　Ebd., S. 269-70.(Buch IV, Kap. III.)

(16)　Ebd., S. 275-7.(Buch IV, Kap. IV.)

De Sismondi は、生産者が互に無制限の競爭を行ひつゝあり且つ財産の集中を見つゝある所の現代の社會に於ては、國內に於ける生産額は增加する一方なるに消費の需要額は却て減少を來し、茲に必然的に生産過剰を來すに至らざるを得ないものであるとなし、Say 及び Ricardo 等が個々の生産物に就いては生産過剰を生じ得るも一般的生産過剰は起り得ずとなせるに反して、國內に於て各種生産物の全

般に亘つて生産過剰の生ずることを必然的と考へて居ること、凡そ斯くの如きものがある。否、彼れは、單に國内に於てのみならず世界的にも生産過剰の生ずることをさへ可能と考へて居る。即ち彼れは云つて居る。「財産が少數の所有者の手中に集中せらるゝことによつて國内市場は益々狹めらるゝが故に産業は自ら外國市場に販路を求めざるを得ざるに至るのであつて、生産が消費を超えつゝある」が如き一切の諸國は等しく其の眼を外國市場に向けることになる。……然るに、世界の市場に於ても事は内國市場に於けると同樣であつて、其の販路の擴大は全世界の裕福の結果としてのみ可能となるのであるが、不幸にして、今日諸國に於ては何れも誤れる政策の結果として教化の進歩と消費の增進とが妨げられて居る。生産が需要に制規せられずして利用し得る資本額によつて制規せられ、生産額が消費額を超過して其の間に均衡を得ざることは、種々の形相の下に現はれて居り、又、種々の商業報告雜誌の記事、旅行者の談話等によつても明白である。此の一事は、吾人に向つて、生産者が一産業を其の頽勢に在るの故を以て斷念放棄することの不可能なるを示し、結局は破産に終らざるを得ざることを示して居る(17)と。

(17) Ebd., S. 278-82.(大意)

斯くして de Sismondi は、斯かる必然の事實、目前の事實、「國内の何人の目にも明かなる此の事實」をば發生不可能の事態なりとなせる Ricardo 等の如き「諸學者が、之を了解せむともせざるは何故なるか」と反問して、其の誤りは、彼等が年々の所得と年々の生産物とを同一視するの謬想に基づくものであると斷じて居る。(18) 「Ricardo は Say を眞似て、資本は如何に多額なりとも國内に於て使用せられざるものあることなしと云ひ、各人は生産物を使用又は販賣せむが爲めにのみ生産し、又、直接に使用せらるゝか或は新生産物を生ぜしむるに適する物を買はむが爲めにのみ販賣する、從つて、生産者は自己の生産物の消費者となるか或は他人の生産物の購買者、消費者となる、と云つて居るが、此の原則を以てしては、商業史上に於ける最も確實なる事實、即ち市場に於ける供給過剰を了解し説明することが出來ない、生産は增加しつゝあるに資本利潤と賃銀とが屢、同時に低落することある所以を説明することが出來ない。年々の生産額と年々の所得とを混同するは、全科學を蓋ふに厚き幕を以てする所以に外ならない。唯、兩者を分離せしめるとき、始めて總べてを

明瞭ならしめ、一切の事實を學說と調和せしめ得るのである」と。(19)

(18) Ebd., S. 282.

(19) Ebd., S. 282-3.

五

一般的生産過剩發生の可能性に關しては、Malthus は既に千八百十一年二月の Edinburgh Review に一文を寄せて Bullion Committee の所說に贊意を表したる場合に此の點にも言及して (1) de Sismondi よりも先鞭を付けて居るが、de Sismondi の著書 Nouveaux Principes. の公にせられたる翌千八百二十年に Principles of Political Economy, etc. を公にし、其の中に於て正面から Say 及び Ricardo 等の所論を批評し排斥して居るのである。此の書は、著者が生前に執筆したる草稿によつて千八百三十六年に訂正第二版が W. Otter の手で出版せられた、そして此の版は Say, Ricardo, James Mill 等との論爭並びに幾多の新事實によつて暗示せられたる重要なる說明及び訂正を加へられたが、所論は根本的には變る所はなかつた (2) のであるから、以下、此の第二版の佛譯 (3) によつて其の所說の大要を窺はう。

(1) Bonar, Malthus and his Work, II. Ed., pp. 287-8.

(2)(3) Malthus, Principes d'Economie Politique, Édition Guillaumin, 1846. Avis de l'éditeur. p. V-VI.

Malthus は、千七百九十八年の『人口論』に於ては「眞實に人口をば現存の生活資料の程度に維持する原因如何を研究」したが、千八百二十年の『經濟原論』に於ては其の第二篇一章に於て「此の生活資料に影響する主たる原因、又は富の增加の形に於ける生産力を發達せしむる主たる原因如何を研究」(4) して居る。而して、若し、頻繁に劫掠の憂目に逢ふことなき國に於て、眞の富が或る期間後に其の國の生産力と略、比例を保つに至らざる場合には、其の原因は不斷の生産を奬勵する充分なる刺戟の缺如せることに存すとなし (5)、斯かる見地よりして第一に人口を論じたる後（第二節）、次に資本集積即ち貯蓄を論じて居る（第三節）。其の云ふ所によれば、富の永久的增加あらむが爲めには資本の恒常的增加あることを要する (6)、然るに此の資本增加は節約によつて行はれるものであつて、「客嗇又は消費の一時的減少すらも富の增加にとつて屢、有用であり、時には絕對的に必要でもある。然しながら、一國は消費の永久的減少より生ずる資本集積によつては決して富裕となり得ない。蓋し、斯かる集積は生産物に對する有效需要を充たすに必要なる程度を遙かに超過し

て、程なく其の效用と價値との一部を失ひ、其の結果として富たるの性質を失ふに至るからである」。(6) 加之「資本增加は望ましき所なれども、生産物の需要が生産者に相當の利潤を與ふるに足らざる所、資本家が其の資本を有利に使用すること能はざる所に於ては、資本增加を目的とする所得節約行爲は程なく集積の傾向を弱め資本家を害して有用に眞實正規の資本を增加せしむることなきの結果を來すに過ぎない」(8) と云ふのである。

(4) Malthus, op. cit., p. 273.
(5) op. cit., p. 274.
(6) op. cit., p. 276.
(7) op. cit., pp. 289-90.
(8) op. cit., p. 291.

即ち Malthus の云ふ所は、資本集積の爲めに節約の行はるゝ場合には、一方に於て資本の增加によつて生産額の增加を來すと同時に、他方に於ては需要の減退を來して、茲に生産過剩を惹起すると云ふに在るのであつて、Say 及び Ricardo 等とは正反對の結論に達して居るのである。即ち云ふ。「幾多の功績ある二三の著者は、或る種の生産物に就いての部分的供給過剩は容易に發生し得べきも一般的に總べての生産物に就いての供給過剩は生じ得ずと考へた。蓋し彼等の見る所によれば、生産物は常に他の生産物と交換せらるゝものなるが故に、一半は他の一半を購ふに役立つ。斯くして、生産は需要の唯一の源泉なるが故に、一生産物の供給過剩は他の或る生産物の供給に不足あることを證明するに外ならず、と云ふに在るのである。Say 氏に至つては、經濟學に關する其の好著に於て、更に遠くまで推論して、一生産物の消費は之を市場より退かしめて需要を減せしめ、一生産物の生産は同じ割合に於て需要を增加せしむとさへ斷言して居る。然し此の說は、其の一切の擴張と共に、全然誤れるものであり、且つ需要供給を支配する幾多の大原則と明かに矛盾せるが如くである。事實、生産物は常に他の生産物と交換されると云ふことは全く眞實でない。生産物の最大部分は直接に生産的勞働又は人的勤勞と交換される、而して、此の一國の生産物が其の當然に交換される勞働に比較して過剩なるとき價値の低落を來し得ることは、恰かも、單一の生産物が供給過剩によつて勞働又は貨幣に比し價値の低落を來し得ると全然同樣である。今、資本集積の

爲めに所得の節約の行はるゝ場合に於ては、市場に存する有らゆる種類の生産物が異常に大なる分量に達すべきことは明白である。何となれば、從來の不生産的勞働者は資本集積の結果として新に生産的勞働者となり生産額の増加を來すに至るべきも、而も勞働者の總數は同一であり、從つて其の生産物需要量も同一であり、資本家及び地主の購買心及び購買力は從來よりも減少を來し居れるが故に、生産物は勞働に比較して必然的に價値の低落を來し、利潤を大に減少せしめ、當分の間は新なる生産を妨げるに至るであらうからである。然し、斯かる狀態こそ正しく供給過剩を意味するものである。而してそれは、此の場合には明かに一般的であつて部分的ではないのである」(9)と。

(9) op. cit., pp. 279-80.

斯くして Malthus は、「一般的生産過剩の發生不可能を主張する「新說の主要なる唱導者たる Say, Mill, Ricardo は、此の問題に對する見方に於て或る根本的誤謬に陷つて居るが如くに見える」(10)として三個の點を指摘して居る。其の第一は、「彼等は生産物をば相互の割合を比較すれば可なりと見做し、之を消費者の數及び欲望と比較して居ない」(11)と云ふ點である。「若し生産物にして相互にのみ比較せらるゝに過ぎずとせば、生産物が同時に同じ割合を以て増加せば依然として同一の相對的價値を保つべしと云つても誤とはならない。然し、當然比較すべき所に從つて、此の生産物をば消費者の數及び欲望に比較する場合には、消費者數に増減なく而も節約心によつて欲望の減退し居れる時に際して生産物に多大の増加を來さば必ず や勞働を以て測れる生産者の價値に多大の低落を來すべきことが發見せられるであらう」(12)。「彼等は、需要とは一生産物をば之と同量の勞働を要したるべき他物と交換せむとの申出に外ならずと云ふも、此の一事のみにては有效需要を構成しない。是等の二生産物は同量の勞働を要したりとするも、其の勞働量を支拂ひ得ず利潤を與へ得ざる程に豐富となる場合には、是等の生産物に對する需要は有效的とはなり得ない」。(13) 尤も「要したる勞働の割合から見て例外的に低廉な時價を有する生産物が販賣に附せられる場合には、必然的に需要の増加を來すであらう。……唯、大なる困難は、斯かる生産物は資本集積及び貨物増加の必然的結果たらざるが故に、如何にして之を製作獲得すべきやの點に在る」。(14) 「Ricardo は、概論的に資

本は過剰たることあり得ずと主張しつゝも、唯だ一つ、資本集積が人口增加よりも急速なる場合には利潤の低落を來し得ることを認めるとの讓歩をなさゞるを得なかつた。而も此の讓歩を以て、一般的原則と衝突するものにあらずと附言して居るが、予を以て之を見れば、此の讓歩は明かに一般的原則を完全に覆へして居る。假りに、人口增加が此の弊を救濟すると云ふ眞ならざる事柄を暫らく是認するとするも、人口增加には十六年乃至十八年を要するに他方に於ける所得の資本轉化は一層急速なるを如何せむ。若し斯かる事態の起る毎に生産物の一般的過剰を來すとせば、如何でか、原則として資本は過剰たり得ずとか、生産過剰は部分的にして決して一般的たり得ずとか云ふことを得むや[16]と。

(10)(11) op. cit, p. 280.
(12) op. cit, pp. 280-1.
(13) op. cit, p. 281.
(14) op. cit, p.281-2.
(15) op. cit, pp. 282-3.

Say 及び Ricardo 等の陷れる根本的誤謬なりとして Malthus の指摘する第二の點は、「彼等が怠惰又は休息の愛好の如き、人間にとつて一般的にして重要なる動機の影響を斟酌して居らない[16]と云ふとである。Ricardo は、農業者と工業者とが互に食物及び衣服の餘剰を交換するの慣行を有する場合には、兩交換者が生産力增加の結果として必要品の外に奢侈品をも生産するに至るとも兩者は互に奢侈品を交換するが故に何等の困難も起らず」と云へる場合に於て、人は常に怠惰よりも奢侈品の享樂を撰ぶものなることを豫想し、兩交換者は各自その利潤を所得として消費するものなることを豫想して居る。然し、若し人が奢侈よりも怠惰を撰ぶとせば、其の結果、明かに、ヨリ大なる生産的資源に對して、ヨリ少なき需要を生じ勞働に對する雇傭にも缺如を生ずるであらう。……人類の歷史は、産業の刺戟に必要なる奢侈の嗜好の發達の頗る遲緩なることを示して居る。人間を以て、産業の果實よりも怠惰を撰ぶこと決して是れなきものなりと信ずるの誤謬なることは、一二の國に一瞥を投ずることによつて了解せられるであらう。[17] 又「論者は、生産物に對する需要を抑止するものは惰者の側に於ける生産の缺如なり、若し彼等にして生産せば忽ち生産過剰は消失せむ、と云ふ。されど、こは問題外に逸出せる議論で

ある。問題は、社會の現狀並びに慣行に於て、生産せむとし節約せむとする總べての人々が、各自市場に齎らすべき商品に對して之に比例せる需要を發見し、以て生産過剩を防止することを得るや否や、に在る」。(18) 更に「論者は、世には決して消費に對する嫌忌あることなし、唯、生産に對する嫌忌あるのみ、と云ふ。然るに、工業者が生産を過大ならしめつゝ而も消費を節約する場合には、彼等が消費の爲めに物品を買はむとする其の欲求は果して其の手段と比例を保てりや否や。彼等の目的と意圖とが消費に在らずして生産に在ることは、彼等の資本の用法が之を示しつゝあるにあらずや」。(19)

(16) op. cit., p. 284.
(17) op. cit., pp. 284-5.
(18) op. cit., p. 285.
(19) op. cit., p. 286.

更に、Say 等の陷れる第三の而も最も重大なる誤謬なりとして Malthus が指摘して居る點は、彼等が「集積は需要を保證すと想像して居り、消費せむとを目的として人に雇はるゝ勞働者の消費は生産物の生産增加を繼續的に奬勵するに充分なる眞實の需要を創生せしむと想像して居る」(20) ことである。「Ricardo は、所得年額十萬パウンドの所へ更に一萬パウンドを增さば、或は支出の增加を來し、或は生産に投ぜられ、或は生産者に貸付けられて、何れにしても需要增加してそれが種々の物に向けられる、と云つて居る。此の論理に從へば、若し世の富者たる者が集積の目的を以て安易及び奢侈の慣行的享樂を中止する場合には、一國の資本の殆んど全部は必要品の生産に向けられることとなり、耕作及び人口の一大增進を來すに至るであらう。斯かる場合には必需品の分量は需要以上に達すべきが故に、是れこそ Ricardo が一般的過剩の到來を認めたる其の場合の實現に外ならないのである。然し斯かる事態は永續しない、蓋し、右の結果として生ずる價値の低落は耕作と集積とを停止せしむるに至るからである」。(21) 故に、商業、製造業及び人的勤勞を奬勵する支出の行はるゝことなくんば、地主も耕作を充分ならしめるの理由を有せざるべきこと明白である。「農夫も工業者も、共に相手方の生産する奢侈品を消費せむとしつゝある間は無難なるも、一方又は双方が墳遇改善の爲め……に節約せむとするに至れる場合には事態一變を來すのであつて、農夫が節約すればそれによ

つて過去に於けると同量の生産物を買ふの手段を工業者から奪ふこととなり、土地に投せらるゝ勞働の果實、生産力の著しく增加したる勞働の果實に對しては、明かに何等の販路も存せざるに至るであらう……」。(22) 又、「工業者の數は全く農業者の需要如何によつて定まるものである。優良なる機械の力を藉るときは社會に普通の衣服を供給せむが爲めには極めて小數の工業者を要するに過ぎない、而して此の工業者は、充分に耕作せられたる土地の生産物の普通の餘剩中の極めて一小部分を吸收するに過ぎないであらう。故に、或は生産物の需要に於て、或は勞働者の需要に於て、一般的缺乏を來すに至るべきこと明白である。消費せむとする適度の傾向が生産力の如何に拘らず需要供給の間に適度の割合を保たしめ得ると同樣に、集積の熱情が必然的に社會の組織及び慣行よりして當然消費せらるべき分量以上に生産物を生ぜしむるに至るべきことも等しく確實なるが如くである。若し然りとせば、消費の熱情と集積の熱情とを恰かも同一物なるかの如くに見るは確かに重大なる誤謬であり、生産的に雇傭せらるゝ勞働者の衣食に向けらるゝ需要が生産物の需要を保證し、其の生産に用ひらるゝ資本の利潤を保證し、地力及び勞働力を充分に利用して原料品完成品の可及的最大量を創生せしむるに至ると思惟するは頗る重大なる誤謬である」。(23)

(20)(21) op. cit., p. 286.
(22) op. cit., p. 287.
(23) op. cit., p. 288-9.

六

市場理論に絶大の確信を有する Say は、Ricardo からは贊成を得たるも、此の贊成者と共に、de Sismondi 及び Malthus の如き有力なる學者の反對に接して默止することを得なかつた。即ち Say は、de Sismondi の Nouveaux Principes, 1819. の公にせられたる其の年に Traité の第四版を出すに當つて、市場理論を展開する章中の脚註に於て de Sismondi に對して簡單なる答辯を與へ、「de Sismondi は一般的生産過剩の可能性を論じ其の例として英國の商品が新大陸諸國に於て滯積しつゝあるの事實を擧げ居れるも、彼れは予が分配を論ずる本書第二篇の最初の三章に述べたる理論を了解せざりしものゝ如くである」と云ひ、英國の商品がブラジルに於て滯積し

つゝあるは同地に於て生産の不足せるが爲めである、若しブラジルに於て生産多大に行はれ、アメリカより英國への輸入の關稅に妨げらるゝ事實なくんば、南北兩米に於て滯貨を來すべき筈はない[1]と答へた。然るに、翌年に至つて更に Malthus の反對論にさへ接するに至つたが爲めに、茲に忽ち筆を執つて同年一書を物し、Letters à M. Malthus sur différents sujets d'économie politique, notamment sur les causes de la stag-nation générale du commerce, 1820. と題して之を公刊し、Malthus 宛の五通の書簡の體に擬して Malthus と de Sismondi との兩者に對して[2]答辯するに至つた。

（1）　第四版英譯、第三米國版、七九頁
（2）　op. cit, p. 616 (Ie Lettre)

先づ、de Sismondi に對する答辯の部分を見るに、それは二つの點に觸れて居る。其の一つは生産過剩の發生原因に關してゞある。此の點に就いては、Say は、吾人が消費目的物を買ふは貨幣を以てするに在らずして實は生産物を以てするものなり、從つて、生産すること多きほど購買する所も亦多し、多く賣れざるは多く生産せられざるが故なり、との市場理論の骨子を述べたる後、de Sismondi が、歐洲に於ては欲望以上の産業及び製作を有するに至つて其の結果たる過剩は世界の他の部分にも及び始めたりとて新聞雜誌の記事及び旅行者の談話を紹介し、學者が此の事實を等閑視する其の誤謬は生産を所得と同一視する點に在り、となして、Ricardo の Say 贊成論を引用したる數頁に亘る彼れの言を引用し、之に對して、曩に Traité 第四版に示したる自說と答辯とを一層詳細に敷衍說明して答辯として居る。[3]

（3）　op. cit, pp. 616-8. (Ie Lettre.)

第二の點は機械の利害に關するものである。Say は、機械には、一方では、生産物の價格を低落せしめつゝも其の賣上を增加せしめ得るが如くに生産高を增すの利益の外に、更に自然を克服するの利益あるも、他方では、知力及び資本を基本とする生産者の所得を增し、肉體的勞働者の所得を減ずるのみならず、此の減少の突然に來る場合には當事者を多少苦しましむるの弊あることを一言したる後、de Sismondi を評して曰く、「彼れは、機械は消費の需要が生産以上に存する場合には有利なれども、既に生産が消費に充分なる場合には厄災となる、そは、消費者に對しては從來よりも低廉に滿足を得しむるのみなるに反し、生産者に對しては生活そのも

のを停止するに至らしむ、生存の利益と廉價の利益とを對照して考ふるは惡ましきとなり、と云つて居るが、此の場合に彼れは、機械が廉價を齎らして消費者の所得增加を來さしむるの利益あることを充分に了解し居らざるもの丶如くである。從來八フランなりし物が三フランに下落したりとせば、差額五フランは他の物品の購買に餘分に用ひらるゝが故に此の額だけ所得を增したることとなり、之と同じ程度の低落が吾人の購入品の一切に於て起らば吾人の所得は八分の五を增したることとなる、而して、一物に就いて支出額を節し得たる金額は先づ最も緊要なる物より順次に他の諸物品の爲めに支出せられ得ることとなるも、彼れは此の利益を感知して居らないのである。彼れは、消費者の所得增加は勞働者の驅逐によつて購はれたるものなりと云ふも、予は之を否定する。製粉工場の設立を見るに至るとも從來の麥粉手挽勞働者を無職たらしむるにあらずして單に、之を轉職せしむるに過ぎない。或は、失業したる者が直ちに資本を得て他の職業に轉ずるものと假定するも、社會に於ける生産物の增加にも拘らず所得の增加を來さゞるが故に生産物を賣ること能はざらむと思惟する者あり得べきも、實は彼等の生産する事實のみによつて社會の所得は增加を來すのである。故に問題は、轉職の必要を生ずるの一事が果して弊なりや否やに歸するのであるが、一産業に於ける進歩は他の諸産業の全體に利し、支出節約よりして社會に與へらるゝ所得增加は他の諸物品にも波及する。勞働者の職を失はしめたるものは製粉工場の一方面のみであつて、他の凡百の職業の擴張の餘地は依然として殘存して居る。加之、機械は進歩するにつれて新發見を行ふことが困難となり、複雜を增すにつれて製作に費用と勞働とを要すること大となるが故に、此の一事が失業を緩和し機械採用の調制となつて機械の弊を略、救濟することになる。洵に、新機械の弊は人の恐るゝ程に大ならず、而も利益は永續的である。De Sismondi は、手編女工十萬人を有する靴下工場に於て新に機械を用ひ、職工を千二百人に減じて依然千萬足の靴下を製造するものとして、舊新二つの場合を比較し、後者の場合には消費者に五十サンティームの廉價の利益を與ふるに止まつて而も其の養ふ勞働者數は十萬人から千二百人に減少する、と云つて居るが、斯かる結論は許し難き計算に基づいて居る。彼れは、手編の場合には費用總額五千萬フランに上るも機械編の場合には千二百五萬五

千フランに減ずると云つて居るが、予は、斯くも大なる節約が行はれるとは思惟しない、然し、假りに斯かる巨大の節約が行はれるものとせば、靴下の價格低落は其の消費を奬勵して、從來十萬人なりし勞働者を却て倍加するの必要を生せしめるに至るであらう。假りに靴下の需要增加せずとするも、他の幾多の物品に就いて需要の增加を來すであらう。蓋し、機械使用後に於ても社會には同額の所得があり、同量の勞働者・資本・土地が存するからである。斯くの如きは、原理が敎へ經驗が確めて居る事實である。英國人が苦しみ de Sismondi が人類愛の語調を以て痛嘆しつゝある諸弊は、機械の採用に基づくにあらずして他の原因に基づく。救貧に關する諸法律、生産費を高からしむる高率關稅の如きは其の主たるものであると」。(4)

(4) op. cit., pp. 637-41. (IVe Lettre.)

轉じて Malthus に對する返答たる部分を見るに、Say は先づ Malthus の非難中の二點に答へて、以て、生産物は生産物を以てしてのみ購はると云ふ自說を辯護し立證せむとして居る。即ち、Say 等は商品をば必然的に消費者の數及び其の欲望の性質に比較せしめらるべき消費物件たる代りに代數記號たるかの如くに思惟しつゝあり、との非難に對しては、Say は、既に生産物の價値が欲望及び效用を基礎とすることを認め、富に自然的の富と社會的の富とあることを認め、直に採つて以て欲望を充たし難きものは生産費を投じて之に適當ならしめ得ることを說きたる予に對しては、此の非難は敢て當らず、予の說は總べて有るが儘の欲望を基礎とするものなり、と答へて居る。(5) 而して、商品は常に商品と交換せらるゝにあらず、商品の大部分は勞働と交換せらるゝものなりとの非難に對しては、企業による生産の顚末を說明して、生産物は企業家の買入るゝ生産要素の生産的勤勞と交換して獲得せらるゝものなりと云ひ、(勞働なる語を勤勞なる語に擴大すれば)生産物は常に勞働によりてのみ購はるとは予の所說なり(6)と云つて、Malthus 說に步を近づけるかの如き態度を示しつゝ、而も、勞働も一人より他人が買入れて消費する以上は之を商品と呼び得べきものなりと自說を守つて居るのである。

(5) op. cit., pp. 618-9. (Ier Lettre)

(6) op. cit., pp. 619-20. (do.)

(7) op. cit., p. 623. (do.)

斯くして Say は、右の所論を以て「生産物は生産物を以てしてのみ購はるとの說を立證し得たりと信じ、從つて、生産物に對して販路を開くものは生産物なりとの說を棄つるの理由を有せず」と云つて居るが、而も猶ほ Malthus を承服せしめむが爲めに、「先づ第一に、生産量の如何に拘らず又それより生ずる價格低落の如何に拘らず、一種に於て生産されたる分量は其の生産者をして他種に於ける既生産量を獲得せしむるに足ることを立證し、然る後に、如何にして過剩なる生産物が之を消費せしめむとする欲求を生起せしむるやを探求しなければならない」(8)とて、産業が完全なる自由の下に在る場合と幾多の障碍を受けつゝある場合とに分つて、更に論歩を進めて居る。

(8) op. cit, p. 623. (Ile Lettre.)

Malthus の意見は、産業が完全なる自由の下に在る場合でも生産過剩が起ると云ふのである(9)が Say は之を否定する。即ち云ふ。「生産が完全なる自由の下に行はるゝ場合を假定すれば、費用三十フランを要する小麥一俵は同額の費用を要する羅紗一反と同じく價格三十フランであつて兩者は平價で交換される……。茲に注意すべきは、此の場合に、羅紗の生産者全體は羅紗の全部を又は同價なる他の一切のものを買ひ戻すべき資金を贏得したるものなることである。羅紗が費用及び利潤を含めて三十フランを要したるものとせば、此の金額は羅紗の生産者全體の間に分配せられる。勿論この分配高は羅紗の生産に供せられたる生産的勤勞の種類及び分量によつて平等ではないが、然し生産者全體は羅紗全體を買ひ得ることには變りない。又、羅紗の代りに小麥を買はむとせば、小麥は同じく三十フランを要するに過ぎないから小麥全體を買ふことも出來る。……生産者全體が生産物全體を獲得し得ることは常に眞である。(10) Malthus は、若し生産物が增加するか又は欲望が減少する場合には生産物の價格低落して其の製作に要する勞働を支拂ふこと能はざるに至るであらうと云ふも、假令價格低落すとも、生産者が生産物創造の勞働又は他の何れの勞働をも買ふこと能はざるに至るが如きことは決してない。羅紗と小麥との生産者にして各自二倍を生産せば價格は半減するも、彼等は同じ勤勞に對して曩に一反又は一俵の有したると同じ價値を有する羅紗二反又は小麥二俵を取得することとなり、生産と稱する交換に於て同じ勤勞は倍

量の生産物を得ることとなる。然し兩者が互に他と容易に交換せられ得ることは以前と異なる所はないのである。[11] 又 Malthus は、生産力の增加したる場合には羅紗も小麥も互に他を消費し得る以上に生産せらるゝに至らむと云ふも、人口は常に生活資料の許す程度まで增加することを立證せむが爲めに三卷の書を著はしたる其の著者として、消費者數が增加せず其の欲望が節約によつて減少し遂に生産物の一大增加を生ずる場合あることを認め得るや否や。……人間に必要又は快適なる物件の嫌忌せらるゝは購買手段の缺如せる場合に限らるゝこと推理及び經驗の等しく明示する所であつて、此の手段だにあらば必ずや其處に需要を生じ價格を有せしめるに至る。……物が價値を有する以上は、其の生産者は、自己の獲得せむと欲する物と交換せらるべき資料を發見することを得るのである。……勿論困難とする所が、其の生産費に値する生産物を作るに在ることは予も之を知る、然し産業の自由なる場合に斯かる困難あるは、一に生産的勤勞を賣る者の要求過大なるに基づくのみである[12]」と。

(9) op. cit., p. 618. (Ie Lettre.)

(10) op. cit., p. 624. (IIe Lettre.)

(11) op. cit., pp. 624-5. (do.)

(12) op. cit., p. 625. (do.)

Malthus が、Say 等の意見の根本的缺陷の一なりとして、彼等は人間には一般に怠惰を好むの傾向あることを忘れて居るの點を擧げたことは前に記した如くであるが、Say は此の點に對して何と答へて居るか。Say は、人間に此の傾向あることは素より之を認める、然し安息の愛好が享樂に打勝つと云ふ想定は、生産する人々しか買ひ得ないとなす予の主張を却て有利に立證し支持するものであると云ふ。即ち「低級なる生活に甘んずる農夫の間に奢侈品が賣れざるは、彼れが之を買ふべき資料を生産するよりも寧ろ怠惰ならむことを愛するが故である。生産を制限する原因が資本又は人口の缺乏たらむとも、勤勉又は自由の缺如たらむとも、結果は即ち同一である、一方より供給せらるゝものゝ賣れざるは他方に於ける生産の少なきに依る[13]」として、受けたる非難を逆用して自説支持の具に供して居る。而して、更に之より一歩を進めて、自己と共に怠惰が販路を妨ぐることを主張する Malthus

が、他方に於ては「大なる生産手段を有する國には多數の不生産的消費者あることは絶對に必要なり」とて、不生産的消費者の怠惰を販路に有利なりとする理由如何」と逆襲して居るのである。(14)

(13)(14) op. cit, p. 626. (IIe Lettre.)

又 Malthus は、資本を增加せむが爲めに節約の行はるゝ場合には消費の減少と生産の增加とを來して茲に生産過剩を生むと論じ、「消費以上の生産あらむことを虞るゝが故に節約による資本の增加を虞れ居る」も、Say は此の點に就いては、第一に、資本集積は大部分は必然的に遲緩なるものなりとして居る。「何人も、其の所得の如何に拘らず、集積する前に先づ生活しなければならない、而も此の生活は富める者ほど多額の費用を要するのであつて、多數の場合に於ては所得の全額を吸收し、甚しきに至つては資本にさへも喰ひ入る。故に、年々節約が行はるとも、それは年々使用せらるゝ資本額に比較すれば殆んど常に僅少なる割合に過ぎないのである。……多額の貯蓄をなし得るものは大なる財産を有する者に限られるが、大なる財産は何れの國に於ても頗る稀なるが故に、資本が産業の顚覆を來さしめ得るほどの速度を以て增加することはあり得べからざる所である。」故に、Malthus こそは「各國ともに勞働者を給養するの基金が勞働者そのものよりも急速に增加するの危險に曝され居るものなりと云ふも、予は、遲緩なる資本集積よりして生産に一大增加の生ずべきことを虞れない、却て、新資本並びに之より生ずる所得が最も有利に諸生産者間に分配せらるゝことを信ずるのである」(15)と云つて居る。而して第二に、貯蓄が資本集積の目的のみを以て行はれ、資本家が所得を增すも、享樂を增さゞる場合には、彼等は節約せんとする充分なる動機を有せざるに至る、との Malthus の言に贊しつゝも、彼等は節約によつて産業及び生産を利するものであり、此の生産增加は公衆の間に有利に分配せらる、と云ひ、農業者及び工業者の双方が境涯改善の爲めに節約を行ふに至らば互に相手方の爲めに作る奢侈品は共に買手を見出し難きにあらずやとの Malthus の言に對しては、それは集積の意味を誤まれるものなり、集積とは節約せられたる生産物が總べて消費せられざるに至ることを意味するにあらずして、不生産的消費より生産的消費に轉向せしめらるゝことを意味す(16)と云つて居る。

(15) op. cit., p. 627. (IIe Lettre.)

(16) op. cit. pp. 628-9.(do.)

以上 Say は「生産が完全なる自由の下に行はるゝ場合を假定して推理し、斯かる條件の實現せらるゝ國に於て、は其の生産し得る一切のものを消費し得ることを證明し、常に境涯を改善せむとする人間の自然的なる能力及び欲望よりして必ず人口と享樂との增加を生ずべきことを證明した」が、然し、他方、實際に於ては此の無限の生産の力を妨げるものがあつて右の假定の實現を見ることが出來ず從つて事實上に於ては生産過剩の發生を見ることあるべきことを認めて居る。而も此の障碍を研究することは、軈て、販賣を妨ぐるものは生産に對する障碍に外ならずとする理論を證明する所以となる、と云つて居るのである。然らば、是等の障碍は何れから來るか。Say の見る所によれば、是等の障碍には二種類ある。其の一は自然である。食物に對する人間の欲望は重量に於ても價値に於ても他の總べてのものに比して遙に大であるが、自然界に於ては食物の生産は衣料・住宅等の生産よりも一層多大に制限せられて居る。多大の費用を要するが故に餘りに遠方からは之を齎らすことを得ない。國内に於て産出せらるゝものにも限度がある。勿論、勞働及び資本の分量を增さば此の限度を遠ざけることを得るも、何時かは之に逢着するのである。然らば、資本の充分にして國民の産業の旺盛なる英國の如きに於て、農産物の生産が未だ其の極度に到達するに至らざるにも拘らず商品の販賣思はしからざるは何故なるか。其處には社會上の諸弊竇があつて然るにあらざるを得ない。是れ障碍の第二種に相當するものである。(17)

(17) op. cit., p. 630.(IIIe Lettre.)

Say が社會上の諸弊を詳論したる中に於て其の最も强調したる點は租稅の高きことである。「租稅高まればそれだけ價格高まつて購買者を減少せしめる。加ふるに、それは何れの生産者の所得をも增加せしめざるにも拘らず生産物全體の價格を高からしめ、生産者の所得をして是等を買ふに不足するに至らしめ……それだけ購買量の減少を來す。勿論、生産者に代つてそれだけ政府が購買することは事實なるも、それは實は生産者を犧牲として行はれるのである。租稅が未だ所得中の僅少なる部分を占め居る間は國民は活き得るであらう、然し其の割合が漸次に

高まつて所得の大部分を占むるに至らば國民は活きられなくなる。……生産者の狀態に不利なるものある場合には、資本は過剰に存在すとも何人も生産を敢てせむとはせず、企業者は公債を買ひ勞働者は失業するに至るのである。若しそれ、政治上の弊竇腐敗の事實あらば、商人及び製造業者は自己の地位を維持せむが爲めに多大の利潤を要求し、生産費を昂騰せしめ、價格を效用以上に高め、遂に需要を減退せしむるに至るであらう。生産費が販路に對する眞の障碍たることは、生産を迅速ならしむる手段が販賣高を急速に增加せしむることによつて知られる。價格が四分の一だけ低落すれば、販賣高は二倍に增加する。斯くの如くなるが故に、急務は減稅に在る。高稅の負擔は、勞働者以外の諸階級にあつては轉業によつて之を免れることが出來る、然るに勞働者階級は之を免れるに由なきのみならず、他の諸階級よりして頗る重く轉嫁せられるのである。」(18)

(18) op. cit., pp. 631-3. (IIIe Lettre.)

國内に於ける租稅の苛重なる一事を以て販賣を妨げ供給過剰を來す主たる原因なりと云はゞ、然らば租稅の負擔の輕く且つ公平なる米國に於ては供給過剰を見ざるべき筈なるに、事實ナポレオン戰爭後に於て米國に此の事ありしは何故なるか、との疑問は當然に起らざるを得ない。此の點は如何に說明せられるか。Say の答へる所は次の如くである。曰く、「是れ亦、米國に生産する力の少なきに依る。米國は、戰爭中には歐洲と他の諸國との間の仲介者として大に海運の發達活躍を來し、斯くして商業及び海運業の齎らす生産物の多大の輸入を來した。然るに、突然に平和の恢復を見るや、戰時中諸國海港に抑留せられし多數の船舶は一時に解放せられ、米國に於ては嘸や長期間に亘つて物資の不足に困難したることならむと思惟しつゝ、商況の如何を顧慮することなくして陸續と貨物を米國に陸揚した。然し米國に於ては之を消化するに足るほどの巨大なる生産は行はれなかつた。過剰の到來は當然である」(19)と。

(19) op. cit., p. 633-5. 大意(IIIe Lettre.)

更に Say は、生産費の過度の昂騰より生ずる自暴自棄が價値の生産・分配・消費の上に無秩序を來し、延いて屢〻欲望以上の分量を市場に齎らすに至ることを指摘して居る。即ち、生産量を增して以て高き租稅の一部を回復せむと企てる者もあり、

土地・建物・勞働等は重き負擔を課せられつゝあるに資本は之を免がれて居ること もあり、勞働者は生活費の增加に追ひ迫られて一家を支へむが爲めに過度に勞働する、と云ふが如き場合には、生産の自然的秩序は攪亂せられて欲望に關せず生産することになる。又、中には一陽來復を待ちつゝ損失を忍んで生産を繼續する者もあり、休業により適當なる勞働者を失はむことを恐れて生産を繼續する者もある。斯くして、生産・消費の遂行に無秩序を來し、無謀なる生産が行はれて、關稅並びに氣候不順より生する障碍よりも更に大なる障碍を構へることになる(20)、と。

(20)　op. cit., pp. 635-6.(IIIe Lettre.)

終りに Say は、供給過剩の弊は勿論多大なるも而もそは實際よりも一層顯著なるかの如き外觀を呈して居り、且つ、其の過剩も漸次に程度を減ずるの傾向がある、と考へて居る。「世界の市場に溢れたる商品は、其の數量の全體として大なるが爲めに世人の視聽を驚かし、價格の低落によつて商業に一大恐慌を來さしむるも、各種商品に就いて見れば其の過剩の程度は生産せられ消費せらるゝ分量の一小部分に當るに過ぎざることが屢々ある。加之、斯かる過剩は、生産者又は商人が商品仕向地に於ける消費者の欲望の種類・分量に無知なるの結果たることがある。近年頗る投機が行はれたが、それは、諸國間に新に多くの通商開始せられたれども肝要なる統計を缺き居たりしことに基づいて居る。然し、是等の障碍は年を經れば自ら排除せられ、双方の事情が了解せらるれば商品の過剩は自ら已むに至るであらう」。(21)

(21)　op. cit., p. 636.(IIIe Lettre.)

七

生産消費の均衡に關する論爭は Lettres à M. Malthus, 1820. に於ける Say の答辯を以て終局を告げなかつた。即ち同年、de Sismondi は Rossi の主宰する Annales de Législation et Jurisprudence, No. 1. 誌上に一文を寄せて、以て前年十月に McCulloch が Edinburgh Review 誌上に de Sismondi の說を全然誤れりとして非難したるに對して答辯し反駁する所があり、翌千八百二十一年には James Mill が Elements of Political Economy, 1821. 中に於て一般的生産過剩の發生の不可能を論じて Malthus の說に批評を加ふるあり、越えて千八百二十四年五月には de Sismondi が Revue Encyclopédique.

誌に一文を寄せて再び自説を主張し辯護し、數ヶ月後に Say が再び起つて同一誌上に自己並びに Ricardo の爲めに辯ずる所あるに至つたのである。今、此の論戰の經過を概説せむとするに當り、年代の順を追はずして先づ Mill の所説を一瞥し、次いで de Sismondi の二論文並びに Say の所論の内容を一瞥することにする。

（1）　次節註（1）參照。

James Mill が既に千八百八年に於て一般的生産過剰の發生不可能を意味する意見を發表したことは前記の如くであるが、Elements of Political Economy. に於ては其の第四章「消費論」中に於て、先づ消費に生産的消費と不生産的消費との二種類あることを述べたる後（第一節）、轉じて、年々の生産物は年々に消費せらるゝものなりと云ひ（第二節）、從つて消費と生産とは其の範圍を同じうする（第三節）と論じて、以て Say を支持する説を爲して居るのである。Say を支持する Mill の所説は、年々の生産は年々に消費せらるとの意見から出發して居る。曰く「生産及び消費の性質に就いて吾人の確かめたる所よりして、年々に生産せらるゝものゝ全額が年々に消費せらるゝこと、又は、一年度に生産せらるゝものが次年度に消費せらるゝことは、容易に之を知ることが出來る。」「生産せらるゝ物は何れも何人かに屬する、而して其の所有者によつて何等かの用途に向けられる。然し用途は、直接の享樂に供するか終局の利潤の爲めに供するかの二者あるのみ。終局の利潤の爲めに使用することは生産的に消費することである。直接の享樂の爲めに使用することは不生産的に使用することである。」「吾人は、終局の利潤の爲めに使用せらるゝものは出來る限り速に賃銀、機械、原料品に支出せらるゝことを述べた。之は重要なる一事實である、經濟學上に於て不正確なる推理を行ふ者の多數者が陷る誤謬は此の事實を無視することから生ずる。年生産額中より資本に轉化せられむが爲めに節約せらるゝ所のものは必然的に消費せられる、何となれば、之をして資本の目的に叶はしめむが爲めには、それは賃銀の支拂、原料品の購入、又は機械の製作に使用せられなければならないからである。又、年生産額中、不生産的消費に向けらるゝ部分に就いては、斯かる物品を直接使用に必要なる分量以上に貯藏するは損害を招く所以なるが故に、年月を重ねることによつて品質の優良を加ふるが如き少數のものを除くの外は、それ等の總べては常に速に消費せられ又は消費の方向に向けら

れる」と。(3)

(2) 第三節冒頭參照

(3) Elements, I. Ed., pp. 226-7.

既に年々の生産にして年々に消費せらるゝものなりとせば、「消費と生産とが其の範圍を同じうする」ことは右の命題の直接の系論であつて、それは「極めて僅少なる說明を要する」に過ぎない。(3)「人の生産する貨物が彼れの所有せむことを欲する貨物たる場合には、彼れは自己の欲するだけを生産してそれ以上に生産することなき」が故に、此の場合には「彼れの需要と供給とが正しく比例を保つ」ことは明白であつて、勿論均衡如何の問題は起らない。(6) 然し、「若し自ら生産したる物の過剩部分と交換して取得し得る他の貨物を欲求して」「自己の爲めに欲する分量以上に或る貨物を生産する」場合に於ては、市場の爲めの需要供給は果して均衡を保つべきや否や。Mill は、市場に供給せらるゝ生産物は全體としては需要に比して過不足あり得べからず、と云ふ。曰く、「需要は抑〻何物より成るか。需要を構成せむが爲めには、第一に貨物に對する願望、第二に之に對して支拂ふべき對價物件を必要とする。「需要は購買の意思と購買の手段とを意味する。「然し」對價物件は一切の需要の必然的基礎である。……人の齎らす對價物件は需要の要具であり、……彼れの需要の程度を測示する」。然らば、此の對價物件は何物より成るか。「生産する各人は、自ら生産したる以外の諸貨物に對し、自ら市場に齎らすものゝ全額の程度まで願望を有する……。而して、人が既に生産したるも之を自己の消費の爲めに保留せむことを欲せざる所のものは、彼れが他物との交換に於て與へ得る基本である。故に、彼れの購買心と購買手段、即ち彼れの需要は、彼れの生産したるも自ら消費せむとせざるもの「即ち彼れの供給するもの」と正確に等しい」。即ち、「……各人の需要と供給とは必然的に等しい」のである。元來「需要と供給とは特殊の關係に在る語であつて、供給されたる貨物は常に同時に需要の具たる貨物であり、又需要の具たる貨物は常に同時に供給の基本に追加せられたる貨物であり、從つて、何れの貨物も常に同一の時に於て需要物件たり供給物件たるものである。」「若し各個人の需要と供給とにして常に等しとせば、一國に於ける一切の個人の需要と供給も全體に就いて見れば等しかるべき筈である。故に、年生産額は幾何に上るとも、

そは決して年需要額を超過することあり得ない……のである」。(6)

(4)(5)　op. cit., p. 228.

(6)　op. cit., pp. 231-3.

一國の需要は常に其の供給と等しからざるべからざること、一國が決して其の國の生産物全體に對して充分なる市場を有せざることあり得べからざることを「完全に」證明したる Mill は、而も猶ほ貨物が屢〻需要にとつて豐富に過ぐることあるの點を根據とする反對論あるを見て、之に對して、先づ、事實問題として斯くの如きことあるは爭はれざるも、而も此の反對論は其の駁せむとする命題の確實性には影響せず、と云つて居る。曰く、「各人の齎らす需要が其の齎らす供給と等しきこと否定せられずとするも、彼れは市場に於て自己の欲する買手を見出ざることがある。……然し、彼れが其の供給と等しき需要を携へ來りしものたることは必然的に眞實である。蓋し、彼れは其の齎らしたる貨物に換へて或る物を欲したるが故である。彼れは恐らく貨幣のみを欲したりしならむと云つても差支ない、……而も何人に於ても、貨幣を欲するは生産的消費物件又は不生産的消費物件に之を支出せむが爲めに外ならない……」。「既に各人ともに相等しき需要と供給とを有するものなる以上は、若し一貨物の分量が需要以上に存すとせば當然に或る他の貨物の分量が需要以下に存すべき筈である。「……假りに、需要と供給との諸部分量間に於ける斯かる正確なる適合が攪亂せられたものと假定せば……勿論過剩が生ずる。然し之と同じ程度に於て必然的に他の諸貨物に不足なきを得ない。何となれば、此の過剩となりし貨物の或る追加量は、唯一の手段によつて、即ち、資本を他の諸貨物の生産より退かしめ從つて其の生産量を減ずるの手段によつて供給せられたるに外ならないからである」と。(7) 而も Mill は更に一歩を進めて、斯かる個々の貨物に生ずる生産過剩は一時的にして永續せず、と考へて居る。蓋し、「實際に於て、需要供給の諸部分量の適合缺如によつて生ずる結果如何は世人の周知する所である。過剩となりし貨物は價格低落し、利潤減少して、其の生産より一部資本の回收を來し、稀少なる貨物に於ける價格の騰貴、利潤の增加は資本の投入を招き、遂に利潤平均して需要と供給とは茲に適合を見るに至るからである(8)。

(7)　op. cit., pp. 233-5.

(8)　op. cit., p. 235.

然らば、各人が必要品を消費するのみにして年生産の殘餘部分が全部節約せらるゝ場合には、生産物の供給は需要を超過することとならざるや如何？ Mill は云ふ、「斯くの如き場合は生じ得ない、何となれば、斯くの如きは人性の本則と兩立しなからである。然し、假りに斯かる場合が起つたとせば如何。其の場合には、年生産の各自の分け前は、自己の必要品の消費を減じつゝ、需要ある唯一の生産即ち原料品と少數の平凡なる製造品との生産に向けられ、而して其の年生産の分け前は同じ種類の生産に役立つ物品即ち原料品と平凡なる製造品とに向つて支出せらることとなり、各人の需要も供給も同じ物品より成り立つて兩者は必然的に等しくなる」と。(9)

(9)　op. cit., pp. 235-6.

「生産は決して需要にとつて急速に過ぐることあり得ず。生産は需要の原因、而も唯一の原因たり。そは同時に且つ同じ程度まで需要を與ふることなくして供給を與ふることなし」との命題は、以上幾多の證明によつて明瞭なるが如くである

が、それは、新資本と共に新なる嗜好及び欲望の發生することを假定するにあらざれば成立せず、との反對論に逢つた。(10)「然し問題の新欲望・新嗜好が資本の存在そのものゝ中に本質的に又必然的に包含せられ居ることは少しく一考すれば明白になる。新資本は總べて所有者の計畫に從つて何物かの購入の目的を以て支出せらるべきものであり、資本の創造は總べて需要の創造である。一たび此の自明の理にして承認せられむか、そは一切の生産過剰可能論に對する返答となるのである。(10)」又一種或は數種の貨物が需要以上に存する場合には之と同じ程度に於て他の貨物が需要以下に在るべき筈なり、との所論に對しては、豐富に供給せられたる貨物の價格低落するの一事が既に生産過剰に伴なふ一切の弊を包含す、從つてそは生産過剰の存在を否定する議論全體に對する返答なり、と應答した者がある。然し斯くの如きは單に言葉の上に於ける返答に過ぎない。予の主張は、個々の場合には生産過剰あり得べきも全體に於ける貨物の生産過剰はあり得べからずと云ふに在る。(11) 生産過剰に就いての Malthus 氏の說は、若し節約が或る程度に於て行はるとせば、資本は人口よりも急速に增加し、賃銀は頗る昂騰し利潤は之と同じ

程度に低落を來さむ、と云ふに歸するが如くであるが、假りに此の說を認むることとするも、そは生産過剩の存在を立證するものではない、そは僅かに、高き賃銀と低き利潤とを生ずべきことを立證するに過ぎないのである。氏は又、斯くして生じたる高き賃銀は勞働者階級に怠惰を生ぜしむるに至らむと云つて居るが、假りに此の豫言を認むるとするも、そは何等の意義をも有せざるものである。蓋し、若し賃銀が同一であり而も働く分量に減少を來さば、そは同量の勞働に對する報酬の增加に外ならないのであつて、前記の場合を別個の言葉を以て表はしたるに過ぎないからである。Malthus 氏は、人口の最大增加よりも更に急速なる資本の繼續的增加の假定を以てしても、生産過剩を證明することに失敗したのである……」。(12)

(10) op. cit., p. 237.
(11) op. cit., p. 238.
(12) op. cit., pp. 242-3.

八

De Sismondi が千八百二十年に瑞西出版の雜誌 Annales de Législation et Jurisprudence. に於て發表したる McCulloch 反駁文(1)は「社會に於て、生産行爲と共に消費能力も增加するや否やの問題に對する返答」と題して居り、其の後 Nouveaux Principes. 第二版の末尾に添付したる「生産消費の均衡に關する啓蒙中の第一論文に採錄せられて居る、而してそれは千八百三十六年から三十八年に亘つて出版せられたる Études sur l'Economie Politique. 中の第一論文の一部分に相當するものである。今、Nouveaux Principes.（獨逸譯）に採錄せられたものに就いてその要點を見やう。

(1) Edinburgh Review 誌上に掲載せられたる de Sismondi 批評の文の執筆者は單に Ricardo の一門下とのみで其の何人たるかは不明であり、de Sismondi も之に對する反駁文を認めた當時に於ては右の執筆者の氏名を知らなかつた。然るに彼れは其の後に至つて此の執筆者の McCulloch たりしことを知るに至つた(Neue Grundsätze, Bd. II, S. 291. Anmerkung)。

De Sismondi は McCulloch の爲せる所と正反對に、自己に向けられたる批評文を引用して一句一句之に反駁して居る。即ち先づ、McCulloch が「需要と生産とは相互關聯せる且つ相互代用せられ得る表現なり、一種の貨物の生産は他の一物に對する需要を決定す……」と云へる場合を引用して、此の場合に彼れ McCulloch は價格

は生産費のみによつて定まるとなすものなるも、事實、生産者こそ生産費に從つて價格を計算すれ、買手に至つては欲望と支拂手段とに鑑みて決意するものであり、是等二要素の結合と生産物との關係が需要を生せしめるものであつて、此の需要は必ずしも生産價格と一致せず、と評し、更に、商業は生産物を配給して需要に資する所あるも之に對して何等の需要をも創造することなし、既生の生産物を賣らむとする同じ熱心を有する者が市場に現はれて交換を行ふことあるも、そは終局的の需要たらざるのみならず、却て互に過剰なるの一證である、然るに評者は此の商業をも需要と見做して兩者を混同して居る、と反駁して居る。(2)

(2)　Neue Grundsätze, Bd. II. S. 292-5.

次に、de Sismondi は「交換の爲めに市場に提供せらるゝ商品が同費・同價なる限り一種の商品の生産增加は等しく增加せる他の商品の購買に對する對價を提供す」と云へる McCulloch の言は、寧ろ「双方に對する願望が同じ割合を以て增加する限り云々」とするを優れりとするとなし、McCulloch が「一方に於て農業者が百人の勞働者に衣食を給して二百人分の食料品を生産せしめ、他方に於て工業者が百人の勞働者に衣食を給して二百人分の衣服を作らしむる場合には、前者に於ける百人分の餘剰食料品と後者に於ける百人分の餘剰衣服とは互に交換せらるゝものにして、餘剰食料品は餘剰衣服に對する需要を決定し、後者は前者に對する需要を決定す」と云へる場合に於て、彼れは勞働者の消費を補償するに過ぎざる再生産を假定せるものである。若し百人分以上の餘剰を生産する場合には消費を何れに發見するとを得るや。(3) ……又、彼れの論證は等しく生活に必要なる物品の間に於ける交換の必然性を前提として居る。然し、物品が殘りなく交換せられ終るは各人の衣食が同一分量たり且つ等しき努力・犧牲によつて得らるゝ場合に限られる……のであつて、彼れの云ふが如き交換の必然性は、勞働者が最低・最貧の階段に在つて最小量の衣食の爲めに最大量の勞働を供する場合に於て考へ得らるゝのみ。勞働者が未だ此の最低階段に成り下らざる間は、何物と交換すべきかを、即ち、一層よき衣服を求むべきか、休息すべきか、將また修養すべきかを撰擇するのである、(4) と。て現實の社會に於ける交換必然性を否認して居るのである。

(3)　Ebd., S., 296-7

（4）　Ebd., S. 297-300.

McCulloch は前記の論文に於て、「農業者及び工業者各一千人ありとし、勞働者の熟練增加又は機械の採用によつて、各自雇用する百人の勞働者に衣食を給して、農業者は二百人分の普通食料品の外に之と同價値なる種々の奢侈的食料品を生産せしめ、工業者は二百人分の普通衣服の外に之と同價値なる奢侈的衣料を生産せしむるものとせば、普通の衣食料品に對する需要と生産とは嚴に同一であり、農業者の消費せむとせざる奢侈的食料品と工業者の消費せむとせざる奢侈的衣料品とは互に交換に提供せらるゝこと明白なり。故に、是等種々の奢侈品は互に他に對する對價となり購買者となり、商品の需要は嚴に生産と比例を保つて增加せむ」(6)と云つて居るが、McCulloch の此の言に對して de Sismondi は次の如くに評して居る。曰く「勞働の熟練增加及機械の採用よりしては奢侈品は生じ來らず、右の事實より生ずる最初の結果は、從來と同じ種類の生産物が從來の需要以上に增加を來すの一事に止まる。故に、此の需要を增加せしむるか、又は勞働・資本・機械を何れか他の生産に轉向せしめざるべからず、此の轉向が如何にして行はるゝか、McCulloch は此の點に答へ居らず。(6)　又 McCulloch は兩種の奢侈品は互に他に購はると云ふも、抑、此の需要は何人によつて行はるゝや。彼れは、此の場合に生産物の餘剩即ち利潤の存在することを想定し居るも、此の利潤が果して何人の手に歸するやに就いては答へ居らざるが故に、試みに一二の假定を設け、先づ勞働者の賃銀が生産物增加と共に增加するものとせむ。然る場合には勞働者は從來六時間の勞働によつて得たるものを五時間にて得ることとなり、從つて、此の節約せらるゝ一時間を休息享樂修養に向くべきか、或は從來通り六時間を働いて奢侈品を得べきかを決定せざるべからざるに至るが故に、一方の奢侈品が他方の奢侈品と交換せらるゝ必然性ありとは云ひ得ざることとなる。然し商業の歷史は、勞働の生産物增加に伴つて利益する者が勞働者にあらざることを敎へ、經驗は、反對に、賃銀が、殆んど常に此の增加に比例して減少すること、奢侈品の享樂に與かる者は少數の雇主のみなることを敎ふ。然らば是等の少數者は、勞働の生産力及び機械・資本が不斷に增進する場合にも依然として獨り此の享樂を恣にし得るや如何。McCulloch の假定によれば、農業者及び工業者の消費は國の生産物の增加する毎に增加し行かざるべから

ず、富の百倍せる今日にあつては一雇主は勞働者十萬人分を消費せざるべからざるに至る。假りに雇主一人にして能く勞働者十萬人分のレース・絹織物等を消費し得るとするも、農産物の場合には然ることを得ず、農業生産物と工業生産物との割合は均衡を保ち難きに至る、と。(5)

(5) Ebd., S. 302, 305.
(6) Ebd., S. 302-5.
(7) Ebd.,S. 305-8.

更に de Sismondi は、McCulloch が、需要は生産と共に增加すと云はゞ、論者或は、然らば無秩序なる商業の生せしむる市場緊縮及び不景氣を說明すること能はずと反噬し來るべきも、市場緊縮は一種の商品が之に對する對價となるべき商品の增加の追隨し得ざる程に增加したる結果たるなり。若し千人宛の農業者と工業者とが互に交換し得る場合に際して新に千人の新資本家の出現し農業者となるあらば、農業生産物に市場緊縮を生せむも、此の中の半數にして工業者となるあらむか均衡は忽ち恢復せむ」と云つた言を引用する。(6) 而して之に對しては、斯かる論證は、一切の困難を回避せむが爲めに用ひらるゝ方便が常に不可能の事たるに外ならざるの不利を有す、と評して、其の理由を詳論して居る。(8) De Sismondi は思へらく、既に農業上に於ては事實上に需給の均衡を破るが如き新資本の出現を來し、荒地は耕され政治上の變革その他の有利なる事情の生じたる結果として從來の農業國に向つて殆んど其の國の收穫量に等しき程の穀物輸入を來し、穀物の供給は過剩となり農業者は至る所に損失を蒙りつゝある。勿論農業が顧みられなくなる時、新農業國がそれ自身に市場となる時は來るべきも、それまでには數代乃至數世紀を要すべきが故に、今にして是等農業者の困窮を救はむが爲めには如何なる手段を採るべきか。McCulloch の說によれば是等の新資本家の半數を工業者たらしめるを以て足りるとせられるが、斯くの如きは埃及人又は韃靼人に對してのみ與へられ得る勸告である。何となれば、今日未だ海外地方に工業を創生せしめるの時機に達し居らざるが故に、農業者に地位を與へて均衡を恢復しなければならないが、現在の農業者をして化して工業者たらしめることは容易の業でない、況んや此の勸告を容れむが爲めには、諸外國より歐洲に穀物を供給する新農業者の半數に

等しき歐洲農業者をして農業を放棄せしむるを要するに於てをや。更に今日の狀態に於ては農業よりも却て工業こそ公衆の購買力以上に供給しつゝあるのであるが、若し此の際に當つて工業への過大なる投資を一部農業に轉向せしむれば之によつて容易に均衡の恢復を實現し得べきや否や。一國の産業に斯かる變革を來さしめむことは一世紀以内に於て能くし得る所にあらざるに、そは果して年々の均衡攪亂に對する救濟策として役立つべきや否や。若し市場緊縮にして何れかの産業部門に於て規則正しく發生する場合に於ては、其の結果は不斷の生産過剰と同樣に作用するにあらずや。各生産物は特定部類の購買者の需要に適合するを要するも、此の需要は不斷に變動を來し生産者は全世界に擴がれる廣大なる市場の範圍を知ること能はざるが故に、同業者より得意を奪取せむことにのみ腐心しつゝあるのであつて、此の爭奪それ自身が既に生産の過剰を示して居る。商業は安く賣らむことを努めるが、決して均衡を恢復せむとは努めない、又この事を遂げるに適しても居らないのである、と。(9)

(8)　Ebd., S. 308-12

(9)　Ebd., S. 308-12.

而して最後に「一種の貨物の生産にして他と獨立して增加せば、市場緊縮を生ずるか又は販賣困難を生ずべきも、各種貨物の同時に增加するあらば、それ等は互に他を購ひ、生産の增加は需要の增加と歩調を共にするに至らむ」と云ふ McCulloch の言に對しては、「商業上に於ける一般的緊縮は部分的緊縮よりも稀なること疑なきも、若し McCulloch にして自己の身邊を見廻はしたらむには、一般的緊縮の可能なるを知り得たるべけむ。現に商業は至る所に於て無力に陷りつゝあり、最近五年以來その苦患は毫も緩和せられざるのみか、却て繼續的に增加するの觀さへあり」(10)とて其の抽象論を嘲つて居るのである。

(10)　Ebd., S. 312.

De Sismondi は、單に右の如く Ricardo の一門下と名乘れる McCulloch と論戰したるのみならず、Ricardo 自身とも直接に此の問題に就いて意見を戰はせた。即ち、Ricardo が生前に幾日かを瑞西ジュネーヴに送りしとき、de Sismondi は此の根本的問題

に就いてRicardoと兩三回討論した。[11]加之、正確なる計算と幾分形而上學的なる研究とを巧みに結合することを必要とする此の種の問題にとつては口頭の議論のみにては不充分なりとして[12]改めて筆を取つて千八百二十四年五月のRevue Encyclopédique, vol. XXII. 誌上に「生産消費の均衡に就いて」と題する一文を寄せ、以て、主としてRicardoを評し、併せてSayをも評するに至つた。此の一文はNouveaux Principes. 第二版の附錄中に第三論文として採錄せられて居り、且つEtudes sur l'Economie Politique. 中の第一論文の一部を成して居る。今、Nouveaux Principes. 第二版獨譯によつて其の大意を窺はう。

(11)(12) Ebd., S. 317-8.

De Sismondiは、劈頭に於て自己及びMalthusとSay及びRicardoとの間に於ける意見の相違を要說[13]したる後に次の如く云ふ。「現在歐洲の諸國に於て、何れの部門の産業も市場を狹められ、損失を敢てするにあらざれば販賣すること能はざるの狀態に苦しみつゝあるの一事に就いてはRicardoと予との間に意見の一致を見たり。然し其の原因に就いては、予は之を生産の過度又は生産と消費との不均衡に在りとなすに反し、Ricardoは斯かる過大生産も不均衡も共に發生不可能なりとなし、之を經濟組織又は生産物流通の缺陷に歸し並びに關稅に歸せしめたり。……Ricardoは國際貿易上に於ける絕對自由を贊成し、此の自由制度は排外的たらずして各國によつて同時に採用せられ得るものなりと云ひ、此の制度の下に於ては各國ともに互に競爭せずして互に他の得意となる、と云へるも、此の學說の根據とする所は、一國は自ら賣ると同額だけ買ふことを得べし、生産と消費との間には必然的の均衡あり、消費は常に生産と共に增加す、外國貿易は毫も交換を妨害することなくして是等二つの分量の間に完了せらる、そは種々の形態の下に於ける同價値の輸入を通じてのみ種々の嗜好に適合す、との原則に在るものにして、Say及びRicardoに於ては、人は交換目的物を作ることによつて交換を創造し、其の結果として消費を創造するものなり、とせられ、斯くして生産と消費との均衡は立證せらるゝなり。今、歐洲諸國の現狀を見るに、製造業者は數年來販路を見出さずして困難しつゝありしも今や（千八百二十四年）既に恢復せり。……然し此の事實は決してRicardo說の證明となることなし。從來の工業者に代つて現に困却しつゝあ

る農業者が恢復するに至るとも、未だ之によつて Ricardo 説の眞實なることは立證せられざるなり。何となれば、工業者の恢復はスパニッシュ・アメリカに廣大なる新市場の開かれたるに原因し居れるものなるも、今、吾人の立證すべきは、一國が生産を增加するも市場は自ら創造せらると云ふことに外ならざるを以てなり[14]と。

(13) Ebd., S. 316-7.
(14) Ebd., S. 318-21.

斯く問題を示したる後、de Sismondi は Ricardo 説の批評に入る。即ち、先づ「農業者と工業者と唯二人ありとし、各自農産物及び工業産物を百單位づゝ生産するものとせば、是等双方の生産物は互に交換せられて過剰なし。今、生産力の增加を來して各自百二十單位づゝを生産するに至るとするも、兩者の生産物は互に交換せられて餘剩を生ぜず。生産の增加は常に生産者の享樂の增加となる[15]」と云へる Ricardo の言を引用したる後、Ricardo が言葉少なに物語つて居る此の相互的交換は實は頗る複雜なるものであるとて、自ら、生産者の採り得る種々の途を假定したる具體的の例を設けて、既生の生産物が如何に社會に流通し消費の途を發見するやを Ricardo に代つて詳細に説明すると共に、他方に於ては是等の場合を吟味して「果して幾何の程度まで生産が富の一半たりし消費者が富の他の一半たるや[16]」を檢討して居る。此の場合に de Sismondi の設けたる具體例は頗る煩はしき數的説明を以て充たされ居るが故に、茲には成るべく此の數字を避けて筋道だけを見やう。

(15) Ebd., S. 322.
(16) Ebd., S. 322-3.

「彼れは先づ事を簡單ならしめむが爲めに、外國貿易も行はれず、一切貨幣なくして自然經濟が行はれ而も賃銀制度が行はれるものと假定する。而して前記 Ricardo よりの引用文中、發明による生産力の增加なき場合の狀態を次の如くに描寫して居る。曰く、一農業者が十人の勞働者を雇傭して穀物生産を行ひ、或る分量(百二十俵)の收穫を擧げ、其の中より賃銀(一人當り十俵)を支拂ふ。各勞働者は其の一部分(二俵)を食用に供し、殘部(七俵)を生活必需の農工業生産物と交換するのみにて、未だ奢侈品を享樂することなし。唯、雇主のみは利潤(二十俵)の半額を以て勞働者

と同一程度の何等餘裕なき生活を行ふ其の上に、猶ほ半額を以て奢侈品を享樂し得[17]と。此の場合に就いては de Sismondi は、勞働者は餘裕なく奢侈なき低級の生活に甘んじつゝあるに雇主は獨り奢侈的欲望を充たしつゝあるとを指示して居るのみで、何等の批評をも下して居ない。蓋し、彼れの批評の眼目は、生産力の增加せる場合、即ち Ricardo よりの引用文の後半に於ける事相に外ならないからである。

(17) Ebd., S. 323-4

次に發明によつて生産力の增加したる場合に轉向して、生産力五割を加へたるものと假定する。然し事實上農業者が生産せしめ得る高は、第一には畑の面積により、第二には農業資本の價額により、第三には過剩生産物を振り向くべき市場の需要によつて制限せられ居るが故に、今、農業者の取り得る途は(一)勞働者の數を減じて從來と略同量を生産するか、或は(二)從來よりも多量を安く賣つて而も損失することなからむが爲めに同數の勞働者を傭ひつゝ賃銀を引下げるか、何れかの一つに外ならない[18]とて、其の各〻の場合に於ける事相を描寫して之に批評を加へて居る。即ち、de Sismondi は、此の場合の事相を描寫して、若し農業者が右の第一の途を採るとすれば、勞働者は七人に減少せられて穀物百二十六俵が生産せられ、其の中、主人と勞働者七人との生活必需品に八十俵が消費せられるものとして、主人の手に奢侈品獲得の爲めに供せられ得るものが數倍多く（四十六俵）殘り、それが奢侈品工業に從事する勞働者の食料となる。換言すれば。農業勞働者階級の所得及び消費は減少し、富者の奢侈的工業品に對する需要は激增することとなると云ふ。[19]而して之より批評に轉じて、斯くの如くなるが故に Ricardo の云ふが如く流通が何等障碍なく行はれたる曉に於ては生産が消費を創造したること發見せらる。然し此の場合、必然的に、時を度外視することとなり、流通を妨ぐる多數の障碍を不問に附せざるを得ざるに至る[20]と云つて居る。何故に時を度外視することになるか？。De Sismondi 思へらく、其の理由他なし、第一に、生産力の增加によつて農業勞働者間に失業者を出し、彼等階級の消費量の減少、工業生産物に對する需要の減少を通じて工業勞働者の生活も幾分か不安となるが故に、均衡の恢復は一に富者の奢侈品に對する需要の增加に基づく一部工業勞働者の成立に依屬することに

なるが、斯かる奢侈品工業は未だ樹立せられて居ないからである。第二に、一個の奢侈品工業を樹立せむが爲めには新資本を必要とするが、此の新資本は何處に發見せられるか。農具の改良發明は何等新資本を發生せしめない。從つて奢侈品工業勞働者は未だ衣食を給せられるに至らない、否、未だ此の世に生まれて居ないからであると。(21)

(18) Ebd., S. 324-5.
(19) Ebd., S. 325-8.
(20) Ebd., S. 328.
(21) Ebd., S. 328-9.

然らば、若し農業者が右の第二の途を採つて、依然として同數の勞働者を傭ひ續けるとする場合に於ては如何。De Sismondi は此の場合の事相を次の如くに描寫する。曰く、農業勞働者は耕耘以外の事を知らざるが故に解雇されむよりは勞働を安く提供することを撰ぶ。今、賃銀に一割の減少を來すと假定しやう。彼等の所得は一割を減じたが而も食用に供する部分は減少せざるが故に、結局他の必須的なる農工業生産物に對する需要に一割の減少を來す。然るに雇主にあつては、總收穫は五割を增し、賃銀支拂高は一割を減じ、而も自己の食用その他の必需品獲得用に供する部分には變動なきが故に、結局その奢侈的工業品に對する需要は數倍の多きに上ることになる。(32)と。而して茲で批評に轉じて、若し此の奢侈品に對する需要增加が新なる奢侈品工業勞働者の發生を來し、後者が又その所得の處分によつて必需品工業を事實上に刺戟することとなれりとせば、流通完了の後に人口は數割の增加を來し、農場に於ける增加せる農産物は盡く食ひ盡さるゝに至らむ。然し此の第二の途を採れる場合に於ても、斯かる結果を見むが爲めには等しく時と處とを不問に附することとならざるを得ず(33)と評して居る。蓋し、de Sismondi の見る所によれば、第一に、此の假定の實現の爲めには、生産力の增加によつて實は不用とはなりしも之を餓えしめざらむが爲めに雇ひ續けつゝある餘分の勞働者を働かしめむが爲めの新耕作地を別に存在するものと假定しなければならないが、斯かる新耕地の存在は總べての時・處に於て眞實に是認せられるものではない。否、單に新耕地あるのみを以てしては未だ足りない。更に農業者が之を新に耕作することによつて、利潤を得るの望みあるを要するのであるが、歐洲諸國に於ては今

や農業は斯かる地位に居らないのである。即ち、處を度外視する所以である。加ふるに、第二に、機械の發明又は農業勞働の改善によつて勞働者の生産力を增加せしめ得る農業者は又同時に資本をも發見するであらう、と思惟することは、時を度外視することになる。又、奢侈品工業勞働の存在を假定し、發明後には發明前の數倍を算する程の消費に充分なる奢侈品工業あるべしと假定することも時を度外視することに外ならない。勞働の生産力に關する發明が耕作に應用せられて而も從來の勞働需要に減少を來すことなき場合、之に加へて更に社會が一人の農業者と最低の生活に甘んぜざるを得ざる多數の勞働者とより成る場合に於ては、多數の人々の中の僅かに一人のみが科學進歩の賜の利益を收めるのであつて、資本、原料、人間産業等は全社會をば餘りに速かなる農業の進展と均衡せしめ難い、[24] とせられるからである。

(22) Ebd., 330-1.
(23) Ebd., S. 331.
(24) Ebd., S. 331-4.

右の如くRicardoを評したるde Sismondiは、右の論文の後半部に於て、此の問題に對する自己の一般的態度を述べ、且つ此の問題を基礎とする經濟政策上並びに社會政策上の立場を明かにして居る。其の大要は凡そ次の如くである。「人或は予を以て進歩に反對し發明に反對するものなりとなす者あるも、予は決して斯くの如き言をなしたることなし。予は過去在來のものを好まず、現在よりも優れるものを欲す。予の非難は機械、教化の進歩、發明に對してにあらず、勞働者より貧乏以外の有らゆる財産を奪つて何等の保證をも與へざる現行社會制度に對してなり。予は、世の學者が自ら歩み來れる道の誤れるを信ずるに至らむことを希望するものなり。然らば吾人は如何にせば可なるか。予は未だ彼等に行くべき途を示すの自信を有せず。又、現代社會の弊害を救濟する諸手段を提示するとも學者は予の論據を評するのみにて毫も均衡の問題は解決せらるゝとなからむ。唯、予が茲に希望する一事は、勞働者に對して勞働の果實を保證し、機械を動かす人に對して機械の果實を保證するの手段を設くるに至らむことに在り。此の事の成る以上は、需要なき貨物を作らざるの配慮は之を生産者の私利に一任せむとす、蓋し、生産者は

勞働が一層容易となればとて其の故を以て世人の要求する以上の分量を生産することあるまじきを以てなり。同一の生産に於て競爭しつゝある雇主と勞働者との利害を一致せしむるの諸手段は正に立法者の研究すべき所に屬す。社會に於ける勞働の需要增加は人間の進歩の結果たり、且つ人間産業の利益の原因たり。新勞働の需要發生せば、之を充たす爲めの一切の進歩は萬人の利益となつて人口にも增加を來し、均衡を破ることなく過剩を生ずることもなからむ。機械力を增大せしむるの刺戟も與へられむ。然しながら、勞働需要を發生せしむべき原因の發生を待たずして、豫じめ生産することによつて勞働需要を創生せしめむとするは恰かも時計を無理に進行せしむるに等し。勿論時としては企業家が自ら發見したる科學の應用又は外國の慣行に基づいて新工業を開始し、未だ需要なき貨物を生産して幾多の弊を來すことあるも、斯くの如きは長期間内には自ら歇むに至らむ。一般に、市場の貨物横溢を來し勞働者を失業と饑餓とに陷らしむるものは私利に基づく産業の進歩たるにあらずして、却て、産業を人爲的に發生せしめむとする政府の行動たることあり、又、發明を輸入し慣行を打破して新發明を普及せしむるは國に最大の貢獻を致す所以と信じて資本家を覺醒せしめ工場の設立を慫慂する一部市民の愛國心たることありとす。若し政府をして、生産は毫も消費を保證せざることを信せしめ得たりとせば、政府をして現行組織の基礎たる原則に對して一層多大の注意を拂はしむるに至るを得む。政府は、個人的利益の調和を信じ總體の利益に於ける合一を信ずるが故に産業の絶對自由を要求しつゝあり。されど、予は、市況に注意することなく單に産業及び科學の愛好によつて製造業を樹立し、斯くして人間と抽象的學説の事實上の諸利益とを犧牲に供する場合には、そは個人的利益の調和を破るに過ぎざるものなることを了解するに至らむことを希望するものなりと。[25] 彼れの此の一般的態度は亦 Nouveaux Principes. 全篇の中に現はれて居り、特に其の第二版の序文[26]中に簡明に現はれて居る所である。

(25) Ebd., S. 334-335.
(26) Neue Grundsätze, S. XIII-XXIV.

九

Ricardo と共に重ねて de Sismondi から反對批評を受け、而も自ら寧ろ此の問題に

於ける本家本元のたるにも拘らず自己の所說が殆んど默殺せられむとした Say は、「一般に批評に答へることを好まず、眞理はそれ自ら辯護せらるべきものなるかに思惟」(2)しつゝも、盛名ある de Sismondi の眞摯なる批評に答へざるは非禮であり、且つ Ricardo 既に沒して何等之に答ふること能はざるは各國學者の永く遺憾とする所なるべしとて、敢て起つて同年七月右の批評文の揭げられたると同じ雜誌に「生産消費の均衡に就いて」と題する簡單なる一文を寄せて之に答へるに至つた。Oeuvres Diverses de J.-B. Say. Paris, chez Guillaumin et Cie, Libraires, 1848. pp. 250-60. に載せる所のもの即ち是れである。

（1）Say の Traité の英譯者 Prinsep 氏の言。英譯書、第三米國版、八〇頁、註(1)、

（2）Œuvres Diverses de J.-B. Say. p. 250.

Say は此の答辯に於て、先づ、生産は如何に多大に上るとも決して多きに過ぐることなしとする論旨を固執する。「人間社會は之を高所から見れば蟻群の如きものであつて、其の各個人は悉く自己の欲求の對象を得むとして有らゆる方向に向つて動いて居り、其の動くことの多きほど益々その要望を擴大して自己に必要又は快適なる物を益々多く給與せられることになる。此の點までは、人間の産業を制限することにこそ弊あれ、之を更に遠く及ばしめることには何等の弊なきこと何人も了解に苦しまざる所である。……尤も、de Sismondi 及び Malthus の見解は、人間社會に於ける生産方法によつて是認せられるかの如くに見える。即ち、各人は生産物と稱する有用物中の僅かに一種類のみの爲めに働くのであつて他の一切の物は交換によつて之を獲得するの方法を採つて居る……が故に特定の物に就いて欲望以上の分量を生産することあり得るは明かである。……然し同時に、弊は過多に生産することから生ぜずして、適當なるものを生産せざることから生ずるものなることも明かである。若し、人あり、人間社會は人の欲望を滿足せしめ享樂を增加せしめ得る一切の物に就きて社會の消費し得る分量以上に生産することあり得べしと反對せば、予は之に對して、然らば吾人が完全に給與せられ居れる國あるを知らざるの事實は如何にして生ずるや、を反問せむとす。……一國に缺けたるものは消費者にあらずして購買手段である。De Sismondi は、生産物が稀少であり從つて高價なるときは是等の購買手段は一層擴大せらると信じ、斯かる

生産物の生産は勞働者に一層多大の賃銀を得しめると信じて居り、而して、生産が一層活潑であり生産物が一層豐富なるときは國は一層よく一層普ねく給與せらると做す意見を攻擊して居る。然るに予は、今この意見を是認せむとするものである、と。(3)

(3) Oeuvres Diverses de J.-B. Say, pp. 351-3.

次に Say は、生産の最も容易なる貨物は又販賣の最も容易なる貨物たることを論じ、生産は多々益々可なることを論じて、生産過大に陷ることなしとの論旨を固めて居る。曰く、「事實の點から見て、迅速なる生産方法の最もよく知られたる國、生産物の最も多き國は、同時に最も富める國であると云ふことが出來る。而も後者は前者の結果たることを示すことが出來る。凡そ進歩改善とは、同じ生産物を得る爲めの生産費の減少から成る、換言すれば、同じ費用に對する生産物の增加から成るものである。……勞働者の一日の勞働から一層多量の生産物を生ぜしめるの手段が發見されたとせば、生産物は一層僅少の費用にて取得せらるゝことゝなる、而して競爭によつて之を一層低廉に賣らざるを得ざるに至る。De Sismondi は、此の産業の進歩は勞働者階級を犧牲として得られたものであると思惟して居るが、過渡の瞬間を過ぎれば勞働者階級も右と同額を贏得することになる。……綿糸紡績が大なる機械と蒸氣力とを以て行はれるに至つて以來、一層多數の勞働者が雇傭せられ一層高給を支拂はれるに至つたのである。……斯かる結果は何れから來るか。それは價格の低落が販賣を容易ならしめることから來る。生産者は如何にして、價格低廉なるにも拘らず同じ購買手段を有するや。それは、價格の低廉が賃銀支拂額の減少より來りしにあらずして、科學と技術との進歩に基づき同一賃銀に對して一層多量の生産物を獲得するに至つたことに基づくのである。……生産費に於て多大の節約をなし得たる場合に於ては、生産に參與する者の消費し得る生産物の分量は屢、分量に於てのみならず價格に於ても從來慣行の消費量を遙かに越えて居る。是れ蓋し、個々の勞働者が少なくとも從來と同じ程度の支拂を受けて居ると同時に勞働者の總數も增加を來して居り、加ふるに一層多額の資本と一層よく耕されたる土地とが其の所有者に一層多大の利益を與へて居るからである。勿論、此の一般的な考察に於て度外視して居る所の變態あることは否

まれないのであつて、現に數年前の商工業、昨今の農業は困難な年月を經なければならなかつた。然し結局人類の境涯は技術の進歩と共に絶えず改善せられたのである。……今日に至るまで、最も容易に增加したる生産物は又最も容易に販賣せられたる生産物たりしとは常に眞なる所である、而して其の增加そのものが如何に之に對する需要の原因たりしやを吾人は了解した。……予は、de Sismondi とは遙かに懸け離れて、學者は發見ある毎に之が採用を熱心に促がすことによつて、絶えず一階級又は他の階級に打擊を與へるものであるとは信じない、又、學者は全社會をして改善の利益を受けしめずして變動より生ずる不斷の苦惱を嘗めしめるものであるとも信じないのである」と。(3)

（4）　op. cit., pp. 253-6.

然しながら Say は、生産の可能性は軈て超ゆべからざる極限に達することを認めた。「或は、de Sismondi は次の如く云ふであらう。『然し、生産するの可能性には極限がある。假令人の住居・衣服・娛樂・教育に役立つ生産物が無限に增加し互に交換せられ得るとしても、最も必要なる食物は土地の面積に限られて居り、遠くより齎らすの必要を生ずるに從つて益々高く之に支拂はざるを得ざるに至る。果して然らば、生産することによつて儲け得る所得も、食料品に益々高く支拂ふに不足するの點が來るであらう、そして人口の新なる增加は不可能となるであらう』と。予は此の點に於ては意見を同じうする」と。(5) 此の意見は、Say の市場理論に於て注目すべき點である。彼れは從來は資本と勞働とさへ增加すれば生産は自ら限りなく擴大せられると信じて居た。然るに今や生産の可能性そのものに自然的なる極限の到來を認めるに至つたのである。尤も、此の點は既に Lettres à M. Malthus, 1820. 中に於ても其の一端が示されて居つたのであるが(6)、此の答辯に於ては明白に之を認めるに至つたのである。猶ほ、此の考は、此の時に既に用意しつゝありし(7) Traité 第五版に於て、並びに其の後の著作 Cours Complet, 1827-9. 中に於て更に展開するに至つたのであるが、此の點に就いては後に(8)改めて言及することにする。

（5）　op. cit., p. 256.

（6）　Lettres à M. Malthus, IIIe Lettre. 本篇第六節參照

（7）　Oeuvres Diverses, p. 258. en note.

（8）　本篇第十節一三五頁以下

何れにしても Say は、生産可能性の極限の到來を論據として、先づ de Sismondi の生産制限論に反對するの議論の端を導いて居る。曰く「既に事物の本性が自ら漸次に生産と人口との增加に對して一個の極限を構へるものとせば、何故に斯かる時期の到來を人爲的に早めむとするや。何故に人間の知力と技術の可能的進歩とより生じ得べき一切の發展を享受せむことを國民に對して拒絶すべきや」と。(9)

而して之より進んで二三の點に就いて de Sismondi の意見を批評して居る。

即ち第一に、發明の應用に伴なふ弊害の點に就いて、de Sismondi が「試みに人手の三分の一を節約する發明が、貧者の衣服・道具・家財等の一切を生産する一切の工場に於て引續き採用されたと想像せば、之によつて利する者は何れの地方に於ても工場主のみであらう。……工場主は勞働者を減じて生産を行ふであらう。……各個の發明は一部貧者向きの工場の維持をば、贅澤品工場の創設に依屬せしめることになる」と云つたのに對して、Say は、「然しながら、若し最も有りふれたる産業に於ける幾多の進歩によつて、生産參與者は其の利益を減ずることなく却て一層多量の生産物を買ふことを得るに至るものであるとせば、這般の事情は、一般消費品の高價によつて消費を制限せられつゝある貧しき生産參與者にとつては特に有利なるものがある」と云つて居る。(10)

次に、de Sismondi が現代社會の經濟組織よりして當然に發生すべきものなりとして頗る恐れて居る所の生産過剩に就いては、Say は、假令それは發生すとも、元來企業者の誤算の結果に外ならないから、若し企業者にして消費者に適合する生産物を適當なる價格に於て生産するに成功し、消費者にして交換資料を提供するに足るほどに産業的なる場合には、斯かる過剩は忽ち終熄すべく、一轉して繁榮の手段と化するに至る、となせるのみならず、元來生産物は企業者の所産であり、而して企業者の利益は生産物が一國の欲望に適合するの點に存して常に此の點に注意しつゝあるが故に、生産過剩の發生は常に偶發的である、生産者の利益は生産物の生産量をして永久的に欲望を超過せざらしめるの保障となると云つて居る。(11)

更に Say は、de Sismondi が官憲に對して、産業に干渉し雇主と勞働者との關係を制禦することを認めて居る點に關して反對して居る。即ち、de Sismondi が Adam Smith が生産の方針並びに之が實行方法の決定に關して當事者よりも一層よく知

ると自認する行政官の愚を笑へるを知りつゝも、同一の生産に協力する人々の利益を協調せしむるの仕事を立法者の職務と認むる理由何れに在りや、と反問し、勞働者の生活を保障するの義務を雇主に負はしむるの可否を論ずることそれ自身が既に企業心を痲痺せしむるに充分である、とて私的契約に干渉することを排斥し、更に財産の使用及び産業能力の行使方法を制禦するの制度は最も危險なるものであるとなし、若し雇主をして勞働者に或る賃銀を與へるの義務を負はしめるならば、勞働者をしても雇主に對して或る勞働を爲すの義務を負はしめなければならないが、斯くの如きは奴隷制度の再現であり貧者に對する財産權の侵害である、となして、(12) 所謂恒産なき勞働者に對する官憲の保護的干渉をば却て自己一流の財産侵害論(13)を以て排斥し、以て自由主義者としての面目を發揮して居るのである。

(9) op. cit., p. 256.
(10) op. cit., p. 257.
(11) op. cit., pp. 10-11.
(12) op. cit., pp. 258-60.
(13) 本誌第十八卷第十一號、拙稿「ジャン・バティスト・セイの財産論」一三―二一頁參照

十

Sayの市場理論は、其の始めて發表せられてから十數年に亘つて英・佛・瑞の三ヶ國の有力なる諸學者の間に斯くも華々しき論爭を生んだ。而も此の論爭は、目前に一般的なる供給過剰・商品滯積・販賣困難の事實を控へつゝ、一方は斯かる事實の發生不可能を論じ、他方は之に對抗するに其の必然的發生を以てし、双方ともに行るに抽象的言辭を以てしたのであつた。思ふに、斯かる論戰が經濟學上に於て舞臺の前面に現はれ來つたのは、主として、佛蘭西を相手としての彼の二十年戰爭よりして貿易並びに物價の上に及んだ特殊の影響に基づくものであつて、最も正しき概括論が異常な事情によつて最も嚴格に試驗せられた恰かも其の時に當つて、皮肉にも學者の議論は最も抽象的に流れたのである」。(1) 然しながら、經濟學研究法の上に於て、Ricardo流の抽象論法を非なりとして事實に即する觀察的方法を是なりとするSayは、不知不識の間に陷つた自己從來の誤れる立場から本然の途に立ち還つて、當初の所説に幾分の修正制限を加へるの必要あるを悟るに至つた。是れ

即ち、前節に於て指摘したるが如く、de Sismondiに對する答辯に於て生産の可能性に限度あるとを認むるに至つた所以であるが、這般の事情は、Sayが數年後に千八百二十七年二月二十四日附を以てMalthusに送つた書簡中に於て自ら之を告白して居る。曰く

「……予は、效用なる語を以て、生産とは如何なる物より成れるやを了解せしむるに適する唯一のものなりと辯護すると同時に、貴下が、諸書並びに本書(Definitions of Political Economy.)に於て攻擊したる予の市場理論は結局或る制限を受くるものなることを告白せむとす。予は之を感ずることの大なる、遂に昨年末三卷を以て出版せられたるTraité第五版(第一卷一九四頁以下)に於て此の制限を說明し置くに至れり。尤も、Ricardo, Mill, McCullochの諸氏は此の點に關する予の說を採用し、大英國の現內閣も之を採つて其の新商業政策の基礎となすに至れりと雖も、三段論法に執着せむよりは事實の調査と事實の關聯とに執着するの優れるを思ふものなり。(2)」云々」(1)。

(1) Bonar, Malthus and his Work, p. 282.

(2) J.-B. Say, Cours Complet, Édition Bruxelle, p. 645.

然らば、SayはTraitéの第五版に於て如何なる修正を加へたか。彼れは、私が本篇第二節に述べた從來の市場理論をば、其の材料の配置を換へて一層體裁を整へた後に、益々增加する生産の極限如何。日々に多きを加へる生産物は果して何處に於て絕えず相互に交換せられるか。是れ恐らくは人の知らむと欲する所であらう。蓋し、畢竟、無限の增加なるものは抽象的の數量中に存するに過ぎずして、實際に於ては事物の性質によつて自ら有らゆる過度が抑制せられるものであるが、吾人の茲に研究しつゝあるは實に實際的なる經濟學に外ならないからである」(3)とて、抽象論の立場を去つて、新に、生産には自然の限度あるとを認めるに至つたのである。即ちSayは思へらく、凡そ生産に伴なふ種々の困難は生産的勤勞によつて排除せらるゝを常とするものであるが、此の困難は、或る程度を超ゆるときは比例以上の速度を以て增加を來し、軈て程なく、生産物使用の結果として生じ得べき滿足の程度を超過するに至る。而して事の茲に至れる曉に於ては、有用なる物を生産するとは素より可能なるべきも、其の效用は之に費やされる所のものを値せず

して、少なくとも效用は生産費と價値を等しうするを要すと云ふ、生産物の根本的條件を充たさゞるに至る。若し人間三十日間の勞働は以て人間を養ふこと僅かに二十日間に過ぎざるが如きことありとせば、人が斯かる生産に從事せむことは不可能の事となるであらう。尤も消費者の數は食料品によつて制限せられつゝも、其の有する其の他の欲望に至つては無限に增加することは出來る。然しながら、欲望は漸次に其の緊切の度を減ずるに至るが故に、消費者は其の欲望滿足の爲めに敢て供する犧牲を少なからしむるに至るべきこと、換言すれば、生産物の價格中に於て其の生産費の公正なる賠償を得ることの益々困難となるべきことは、吾人之を了解するに難しとしないのである、と。[5] 果して然りとせば、斯かる生産は之に從事せむとする人々の發展を助長することなかるべく、從つて是等の人々は新なる衣服住居その他の需要を構成すること是れなかるべき[6]が故に、販路は茲に其の極點に達したのであつて、それ以上に生産する者あらば忽ち供給過剩を來すべきの道理である。唯、此の際に當つて販路の擴大を來し得るものとては、新なる欲望、强烈なる欲望、多數の欲望を創生せしむるの一事あるのみ。即ちSayは、「何れの國に於ても、欲望を有することの多く、交換に提供し得る物品を有することの多きほど、換言すれば、文明普及の程度の大なるほど、生産物の販賣は益々容易となるものなることは常に眞理たるを失はないのである」[6]と結論して居るのである。

(3) Traité, Ve Éd., tome I, pp. 194-5.
(4)(5) op. cit., pp. 195-6.
(6) op. cit., p. 196.

Sayの千八百二十七年二月二十四日附の書簡を受取つて彼れが市場理論に制限を加へるに至つたことを知つたMalthusは、程なくSayに返書を送つて「Sayが市場理論に或る制限を加ふるの必要ありと判斷するに至つたのを見て喜んだ。そして、彼れ自ら、經濟學の進歩の爲めには屢、經驗に訴へて理論が周圍の事實と合致するや否やを檢證するを要すと常に思惟し居たるが爲めに、最初に示されたる形に於けるSayの學說を是認することを得なかつた」のであるが、既にSayが「生産物なる語義を所論の中へ導き來つて、販賣價格が生産に用ひられたる勤勞の時價を償はざる場合には、土地・勞働・資本より生産せられたる物も最早生産物たらずと云

ふ以上は問題は茲に全く一變したのである。此の種の生産物に過剰を生じ得ざることは明白である……」とて、Say の所説を容認するに至つた。然しながら、Malthus は同時に、「然し、生産物の意義を斯く解して、生産物が過剰の結果、生産費以下に價値低落したるときは最早生産物の名に値せずと云ふは、生産物なる語の普通の意義に反し、生産せられたる效用が即ち生産物を構成すとなす Say 自身の定義にも反す」と評し、「斯かる生産物を從來買ひ續け來りし人に就いて見れば、是等の過剰生産物も從來と同樣に彼れの欲望を滿足せしめることを認めざるべからず。又、過剰の部分も、他人には役立つて、假令生産費を償ふには不足すとも兎に角何等かの價値を保有することは Say と雖も之を認ざるを得ず。人間産業の結果たり而して效用と價値とを有する以上は、吾人は之に生産物の名稱を拒否し得べき理由を見ず……」と抗議して居るのである。

（7）　Lettre de R. T. Malthus. à J.-B. Say. (Cours Complet, Édition Bruxelle, p. 647.)

此の抗議に對しては、Say は同年七月更に Malthus に一書を認めて其の中で之に答へ、以て自己の所説を守つて居る。曰く「市場に關する予等の論爭は今や遂に言葉の爭に過ぎざるに至らむとす。且つ假令生産費の全額を償還する能はずとも兎に角或る價値を有する所の商品に對して、生産物の名稱を與へむことを希望せらる。されど、生産に關する予の學説の根本は、生産に必要なる一切の勤勞が生産物の價値によりて支拂はるゝにあらざれば完全なる生産にあらざることを明瞭に樹立し居れり。六フランを費やして僅かに五フランの價値を生産するに過ぎざる場合には、眞實に生産物とては五フランの價値ある效用ありしのみなると明白なり。若し此の效用にしてそれ以上を要したりとせば、效用と價値とに不足を生じたるなり。予が生産物の名稱を拒否するは此の不足に對してなり。故に予は、眞實に生産せられたるものは販賣せらるべく、販賣せられざるものは總べて毫も生産することなくして無謀に支出せられたるものなり、と云ふの根據を有す。而して予の市場理論は依然として完全安泰なり」と。(8)

（8）　Lettre de J.-B. Say à R. T. Malthus. Juillet, 1827. (Cours Complet, Édition Bruxelle, p. 649.)

右の書簡を以て Malthus その他の人々との間に於ける論戰の筆を擱いた Say は、

同年から始めて三年間に亘つて最後の著作 Cours Complet d'Économie Politique Pratique. を公にし、同書第三部第三章に於て自己の從來の市場理論に對する制限を一層詳細に說き示した。即ち曰ふ。若し總べての生産物にして、互に購はれ得るものとせば、そは分量の如何に拘はらず總べて買手を見出し得と結論し得るが如くなるが故に、一國の産業と資本とより生じ得る生産には何等指示し得る限度なきが如くに見える。茲に於てか此の點に關して重大なる論爭を生じたのである。然し贊否何れの側に於ても生産物の價値を充分に考慮せざりしもの丶如くである。思ふに生産物とは、單に絕對的に云つて人間の欲望に役立ち得る物たるに止まらず、效用が費用に値する物たるのである。此の條件を充たさむが爲めには、生産物の生産費と之が使用より生ずる滿足とふ、性質の相異なれる二物を比較しなければならない。一見したる所、是等兩者を比較することは不何能なるが如くに思はれるが、然し生産費も滿足も共に之を貨幣額に見積ることを得るが故に、間接に比較することが出來るのである。人は各物件に對して出來る限り少く支拂はむとする、然し其の本源的價格即ち生産費が消費より生じ得る滿足を超過する場合には之に對して毫も支拂はないのである。此の一事によつて吾人は、一般に生産物は或る極限（それは積極的に之と指示することが出來ない、又各國の地方的事情によつて異なる）までは增加して互に購はれ得るも、此の極限を超ゆれば或る生産物は餘りに高價となつて其の中に在る效用が消費者に對し之が獲得に要する犧牲を賠償する能はざるに至る、ことを了解することが出來る。事、茲に至らば、生産物は最早生産物たらざるに至り、賣れざるに至り、從つて其の販賣によつて新生産物に販路を提供し得ざるに至るのであると。(9)

(9) Cours Complet, IIIe Partie, ch. III. Édition Bruxelle, p. 163.

然らば各國に於て、生産物をして之より生ずる滿足が生産費と等しくなり得ざる程に高價を要するに至らしめ販路を狹める事情如何。Say は、それは次の四つの事情に基づくとなし、而して其の影響を免がれ得るに至るに從つて販路は益々容易となると云ふ。

即ち、其の第一は、文明が遲れて人間が生産物の充たし得る欲望を感ぜざることである。蠻人の場合に見るが如く、人の欲望を感ぜざる物は決してそれの要する

價格に値しない。然し、之を役立たしむるの途を知るに及んでは其の生産費を賠償するに至るのであつて、此の時よりして、蠻人は文明人の生産物に販路を開き、後者は前者の生産物に對して販路を開くに至るのである。故に、少數不完全なる生産物に甘んじつゝある國内未開の地方民の文化の程度を高むれば、新販路を確保せむが爲めに通商條約を結ぶの要なくして販路は自ら開拓せられる。第二は、生産技術の進歩に見るべきものなく、僅少なる費用を以て生産を行ひ難きことである。生産方法の進歩し居らざる場合には、生産は多額の費用を要し、生産物の價格は多數の消費者にとつては之より取得し得る滿足の程度を超過するに至る。經濟的生産方法の用ひられるに及んで始めて社會の有らゆる階級に生産物の嗜好と用途とが普及する。商品に對する世人の需要は其の低廉となるに從つて擴大せられる。而して之に對しては他の商品を支拂はざるべからざるが故に、後者の生産は前者の增加する事實によつて增加するのである。第三は、行政上の弊害によつて生産費が過度に高められることである、干涉主義・輸出入禁止の如きは云ふも更なり、單に租稅のみに就いて見るも、そは生産費を高め、特に租稅高率なる場合には、消費より生ずる滿足が消費者の購買に際して供せしめらるゝ犧牲を償はざるほどに價格を高からしめ、從つて生産は其の爲し得る發達を遂ぐる能はざるに至る。生産物中に置かれざる價値は、作られ得る他の生産物を買ふに役立ち得ない、從つて、是等に對して見出され得る販路は惡法によつて狹められるのである。而して、最後に第四の事情は、適度の價格を以て取得し得る一切の消費品を過大なる人口が既に吸收したるが爲めに、社會は其の價格を法外に高からしむるが如き費用を以てするにあらざればそれ以上に消費品を獲得し難きに至ることである。生産物の價格をば、其の役立ち得る可能性を奪ひ從つて需要を生ぜしめるの可能性を奪ふ程に高める自然的原因の主たるものを見るに、一國の人口・資本・産業は毫も生産に制限を與へざるものと假定するも、土地が消費に制限を與ふるの時が來る。食料品の價値が其の役立ち得る程度以上に達する時、一日の生活が一日の勞働の生産物よりも高價となる時、即ち是れである。一國の農業が土地の全生産力を盡すほどに發達したる以後に於ては、食料品は之を外國から所得しなければならない。始めは工業生産物と交換して取得するを得べきも、社會が不斷に進歩す

るものと假定するときは食料品を益々遠國から取得するの必要を生じて費用は益々高まり、遂に一日の勞働の生産は以て一日の糧を得難きに至る。然る場合には、何等食料品の増加行はれざることとなつて、茲に人口の極限に到達し、從つて一切の消費の極限に到達するのである。尤も、此の極限には突如として到達することはない。生産の困難、人口増加の困難は、漸次に其の多きを加へ行くのであるが、然し、國の生殖力、内外の交通機關、生活方法、行政の如何に從つて遲速の相違こそあれ、早晩この極限に到達するのであつて、何れの國に於ても生産・消費は此の極限を超えることは出來ないのである。然しながら、苟くも自國の一切の資源を知り之が用法を知る限りは、何れの國も此の極限に達するには未だ頗る遠きものがあるのである。(10)

(10) op. cit., pp. 164-6.

附言　Say の Traité 第五版を公にしたる其の前年に McCulloch は Principles of Political Economy. を公にし、其の Part I, ch. 7. (但し改訂第三版に依る)に於て再び一般的過剰の原因を論じて Say 説に贊し de Sismondi を批評して居る。然し此の書中に現はれたる意見は、Traité. 第五版に説明せられたる Say の自説に對する制限に關しては毫も影響なかりしものと思惟せらるゝが故に、今は之を全然省略することとした。蓋し、Say の自説に對する制限論の骨子は既に McCulloch の著書の公刊以前に於て、即ち、千八百二十四年 de Sismondi に對する Revue Encyclopédique. 誌上の答辯文中に示されて居るからである。猶ほ、生産消費の均衡の問題は後年に至つて多數の人々によつて論ぜられ、就中、生産過剰の必然的發生が論ぜられた。Karl Marx, Albert Aftalion の如きは其の尤なるものである。然し、今は是等の人々の論旨を檢討して Say の説の是非を判斷することをも等しく避けて置く。蓋し、本篇の目的とする所は、當時の學界を背景として Say の市場理論を紹介せむとするに止まるからである。最後に私は、此の餘りに冗長なる拙稿によつて讀者を編纂主任と其の他の關係者とを煩はしたることと少なからざるべきを思つて、茲に陳謝の意を表せむとするものである。